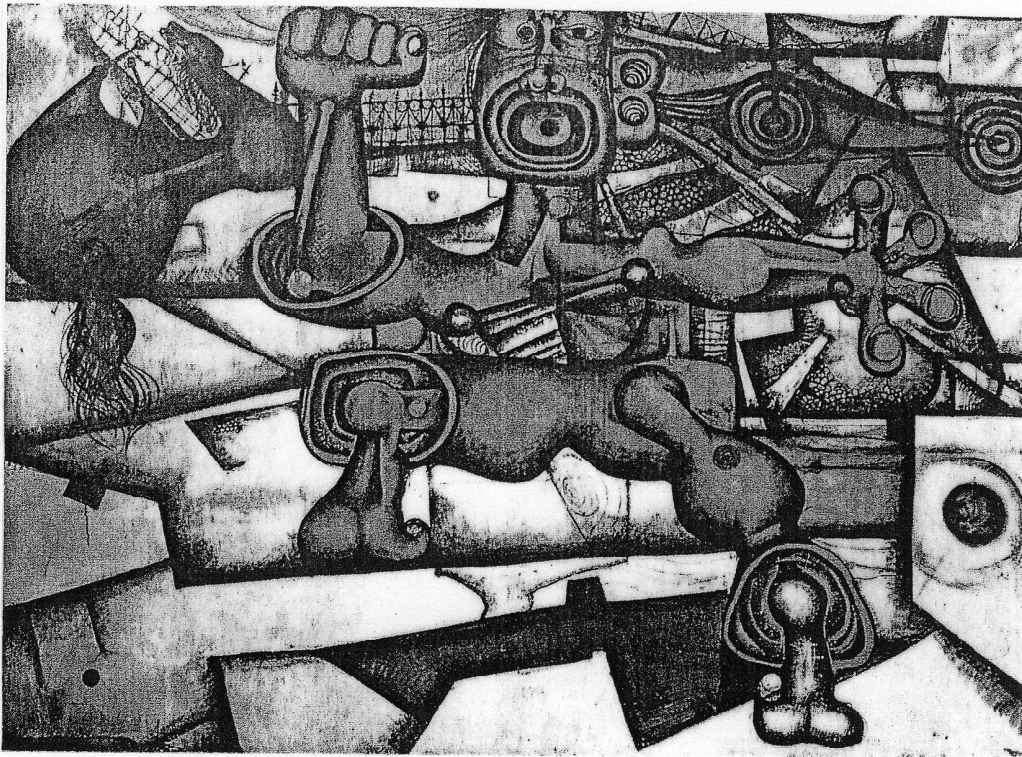


- ^{しゅつたい}出 来する〈生・労働・運動〉群と接続することへ
- 渋谷 望 「ネオリベラリズム的遠近法を超える
『生』が運動になるとき」
- 小倉利丸 「アウトノミアからグローバリゼーションへ
そしてG8をむかえ撃つ」



(「尾藤豊作品集」から)

生・労働・運動 ネット

目次

- はじめに1
- 出 来しゅつたいする〈生・労働・運動〉群と接続することへ3
- 渋谷 望11
 - 「ネオリベラリズム的遠近法を超える
 - 『生』が運動になるとき——
- 小倉利丸25
 - 「アウトノミアからグローバリゼーションへそしてG8をむかえ撃つ」

はじめに——「生・労働・運動」パンフレットの発刊にあたって

社会保障・福祉の容赦のない削減、労働者保護の解体・剥奪という私たちの「生の保障」の破壊——今、私たちに否応なく負わされる「生の困難」が、全世界を「市場原理」で覆い尽くそうとする、ネオリベリズム／グローバリズムによる世界の支配・統治のあり方そのものによるものであるということが、この国でも多くの人々の共通認識になりつつあります。現在の私たちの「生の困難」をひたすら堪え忍ぶしかない個人的な不幸や、自らの資質・能力不足による「自己責任」だとする発想から決別して、この国を生きる私たちの「生の困難」をネオリベリズム／グローバリズムに対する憤りへと転換するためにも、私たちの「生」がどのように抑圧・収奪されているのかを見抜くための「遠近法」の獲得が切実に求められているはずです。

このような思いから、昨年07年の春、私たちは、「アンラーニング・プロジェクト」をスタートさせました。とりわけ、昨年度の「アンラーニング・プロジェクト」の後半の「第Ⅱ期」のプログラムでは、世界各地で活発に展開されている反ネオリベ・オルタグローバリズム運動の動向や、この数年で登場してきたフリーター・不安定雇用労働者といった「保障されざる者」たちの未だ名前のない運動に注目することから、私たちの存在を単なる「コスト」や使い捨ての「消耗品」にまで貶めようとするネオリベリズム／グローバリズムに対抗するための手がかりをつかむことを試みてきました。

「アンラーニング・第Ⅱ期」では4人の話し手を迎えて学習会を行いました。今回のパンフレットでは、その中から、07年9月30日の学習会での渋谷望さん（「ネオリベリズム的遠近法をこえる 『生』が運動になるとき」）の話と、07年11月4日の学習会での小倉利丸さん（「アウトノミアからオルタグローバリゼーションへ、そしてG8を向かえうつ」）の話を収録しました。

この数年、東京や大阪、福岡といった大都市の街頭で、いわゆる「プレカリアート」、すなわちフリーター・不安定雇用労働者や、ホームレス、障害者といった「保障されざる者」たちが、「生の無条件の肯定」を掲げて共に声を上げることが行われるようになってきています。富山の私たちも、昨年4月28日、社会保障・福祉の切り捨てといった、こんなことはもうがまんできない、もうたくさんだ、と思うことをそれぞれが持ちよって富山の街頭でアピールするという、「もうたくさんだ！大行進」を行いました。今回のパンフレットの「出来（しゅったい）する〈生・労働・運動〉群と接続することへ」では、「もうたくさんだ！大行進」を行うに至った私たちの思

いと、それに取り組んで改めて見えてきた私たちの今後の課題をめぐる文章を、併せて収録しました。

99年、シアトルでのWTO閣僚会議を数万人規模のデモで包囲・流会させた「シアトルの乱」に象徴されるような、「世界は商品ではない」というスローガンを合い言葉に掲げてネオリベ／グローバリゼーションに対抗しようとする世界各地での反グローバル運動については、ようやくこの国でも知られるようになってきています。「アンラーニング・第Ⅱ期」の学習会では、規模としてはまだまだ小さなものではあれ、そのような世界各地での反ネオリベ・オルタナティブ・グローバルizm運動の動きに連動・呼応するような、「保障されざる者」たちの反乱・抵抗の兆しとでも呼ぶべきものが、現在、この国の中からそれなりの広がりをもって生み出されつつあることを実感することができたように思います。

そこに見られるような、例えば、「生の困難」への反撃を、反戦運動や、未払い賃金の支給を求める労働運動、更には、自分たちを低賃金・無保障の労働力として搾取する一方で「無能者」・「寄生者」というレッテルをはるメインストリームの社会の差別的な体質を打つ社会・「文化」運動として多面的に展開している、横断的でトータルな運動のあり方に、私たちがつくりだしたい新しい運動スタイルの可能性が存在しているように感じています。人間が資本にとって交換に値するだけの有用なものを提供できる限りで生存をкаろうじて許容されるか、さもなければ容赦なく「廃棄」されるという、まさに社会なき社会とでも言うべき現状に対抗して、この国の「保障されざる者」たちの運動では、賃労働か、さもなければ、社会保障・福祉による公的支援によって生きるかという二分法それ自体を問いなおす「生の保障」要求が行われると共に、人々が生を受け、次世代を育て、病み、老いを迎えることを共同で支える場としての「社会」を、私たちがもう一度どのようにつくりなおすのかという、根本的な問題提起がなされているように思えます。

今回のパンフレットが現在、この国で新しい運動スタイルの萌芽がどのように展開されようとしているのかをめぐる論議のための一つの素材になればと思います。ぜひ、ご意見・ご感想をいただければ幸いです。

なお、最後になりましたが、多忙な中、「アンラーニング・プロジェクト」の学習会での話し手を快く引き受けていただき、また、テープ起こした原稿に加筆・訂正をしていただいた渋谷望さんと小倉利丸さんに、改めて感謝したいと思います。

(2008年6月)

I 「妄想」が隆起する

●「もうたくさんだ！大行進」——その発端は、この悪しき時代を生きる私の身体のきしみが胚胎する、一つの妄想だった。——

今年の2月19日の朝、「新聞」をひらくと、道路いっぱいに参加者が走る光景の「写真」と「東京マラソン 首都大封鎖 3万人快走」という「見出し」が私の目に飛び込んできた。

それを目にしたとたんに、私の身体の中に、「『おまけ組』大行進 首都大封鎖 3万人暴走」という妄想が、大きくふくらんできた。いかなる妄想であれ、妄想は、肥大性こそがその本質であるとはいえ、その妄想の肥大の速度と大きさは、私自身を驚かせるものだった。——「東京マラソン」の場合は、東京都と警視庁による「市民マラソン」（というセレモニー）の「成功」に向けての「交通規制」の結果、「首都大封鎖」となったのはいうまでもない。だが、わが身体の妄想の場合は、「大行進」それじたいが「交通マヒ」を引き起こし、その連鎖によって「首都大封鎖」が生起するのだ。

ちなみに「おまけ組」というのは、この近年よく耳にするようになった例の「勝ち組」／「負け組」というふざけた人の分け方に対して、その分類に入れてもらえず、「おまけ」で生きさせてやっているのだとあつかわれ、だからこそ逆に、「負け組」にわざわざ「お」をつけて、丁寧に呼んでいただかなくてもけっこう、そういう分類じたいを打ち壊してやるぞと、思う者・たちのことで、それじたいが、わが身体の妄想によるネーミングである。

「『おまけ組』大行進 首都大封鎖 3万人暴走」——このわが身体がはらんだ妄想は、わが身体の深みにわだかまる記憶——街路／〈街頭〉の「浸透膜」が破られ、〈街頭〉が励起(スウィング)した遠い〈出来事〉の記憶にもとづく、ノスタルジックな妄想にすぎないのではないか？そのようなノスタルジーから、わが身体が解き放たれていないこととは別に、この妄想へ向けて、わが身体を現に押しているものが、確かにあるのではないか？その日の朝から数日の間、わが身体は、この自問自答にゆれ続けた。

●「もうたくさんだ！大行進」——この妄想は、この悪しき時代にあらがおうときしむわが身体を、そこへ向かって押すものがあってこそそのものだ。

この悪しき時代の中での「社会なき社会」にほんろうされ、「生の保障」の破壊によ

って、その生の解体に追いつめられて「路頭」に迷う者・たちの軌跡の累積が「路頭」の〈街頭〉への転化となって逆転し、〈街頭〉が「スウィング」する予兆を、私の身体は、確かに感知していたのだ。

こうした予兆が私の身体を押している、というよりはむしろ、こうした予兆の西方での表現に相呼応し、この列島社会のいくつかの地点で生起し始めている、この予兆を体現する〈生・労働・運動〉の胎動が、私の身体もまたそのように生きたがっているように、押しているからこそ、わが身体は、この妄想をやみがたくはらんだのだ。

〈生・労働・運動〉 それは、この悪しき時代の「社会なき社会」によって「生の保障」の破壊へ向けて、重層的に決定される〈生〉が、〈労働〉が、〈運動〉が、それにあらい、「生が労働になる」・「生が運動になる」〈註〉というように〈生・労働・運動〉を構成する行動の群れのことである。わが妄想からやや性急に言えば、この名付けようもなく、規定しがたい行動の群れは、すでにふれたように「路頭」の〈街頭〉への転化が惹起する〈街頭〉の励起(スウィング)の予兆なのだが、その励起(スウィング)が一定の強度をもつにいたるとき、それらの行動の群れは、遠く〈街頭〉を生き／行きぬこうとする欲求の噴出——「首都大封鎖 3万人暴走」というように——の導火線となるポテンシャルを胎んでいるように、見える。いいかえれば、それは、その記憶が私の身体の深みにわだかまる遠い〈出来事〉のポテンシャルをあちら側へ「反転」させてきたこの悪しき時代の推力(ネオリベラリズム／グローバリズム)を、こちら側へ逆「反転」させるベクトルを胎んでいるのだ。

「もうたくさんだ！大行進」——数日間、このわが身体の妄想について自問自答にゆれた後、私は、この妄想を分有してもらうことに向けて、動き出したのだった。その自問自答を決して手放すまいと思いながら。

〈註〉 渋谷望「〈生〉が運動になるとき」上・下(「図書新聞」04.3.27・4.3)参照。

なおこれは、P. ヴィルノ「マルチチュードの文法」の「書評」である。

※『「もうたくさんだ！大行進」／『生の保障』研究団 通信・1』(07.6月)より

Ⅱ 「生の保障」研究団のスタートへ向けて

●すでに「もうたくさんだ！大行進」の「呼びかけ」でもふれたように、私・たちは「大行進」と「生の保障」研究団の営みとを^{いっしょ}一対のものとして、進めることを企てている。

「大行進」が、それを試みる者・たちの「生の保障」に関わる何らかの抗議／批判／要求の表現であることは、ここで改めて述べ立てるまでもないだろう。それらの抗議／批判／要求が単純に統一できるわけでも、統一してよいわけでもなく、相互に背反／矛

盾／齟齬しあうものであることもあり得るし、当然のこととしてそれらの底にあるそれぞれの者・たちの「生の保障」についての認識に差異があることも、あらためていうまでもないだろう。問題は、この悪しき時代において進行する「生の保障」の破壊が、そうした「生の保障」についての認識の差異を極めて目的意識的に「悪用」し、人々の「社会的きずな」の分断（「社会なき社会」）を画策するものとして進行しているが故に、私・たちは、自らの「生の保障」の絶えざる再＝定義を試みることによって、それぞれの者・たちの認識の差異を、不断にのりこえることに努めなければならない、ということであるだろう。

私・たちは、自らの「生の保障」についての視野が極めて狭く、視野からこぼれ落ちる課題／見落としている発想／たとえ小さな芽であろうと見つけ出していない要求があることに、自覚的でなければならないだろう。——「生の保障」研究団は、このような意味での「生の保障」の再＝定義をその核心に置き、「大行進」との往復を進める「研究アクティヴィズム」とでも言うべき営みでありたい、と思う。

とりわけ、私・たちの遠近法が、この10年あまりの時間の中で、この列島社会における「生の保障」の破壊の進行が、「圧縮近代」ならぬ「圧縮ネオリベリズム」によって画策されてきたことに、ほんろうされ、混乱と錯誤の内にあることを、私・たちはよくわきまえなければならない。私・たちの遠近法それじたいの変革とそれにもとづく「生の保障」の再＝定義が、「生の保障」の破壊を不可視化する強圧（「自己責任」論!!）に抗い、その破壊が幾重にも折り重なって「社会なき社会」の「なき」の谷間に追いつめられ、〈声〉をあげることもかなわぬ人・人にも届くものであろうとすることは、私・たちの緊急の課題であるだろう。

●そうであれば、私・たちの「生の保障」の再＝定義は、この「社会なき社会」の〈むこう〉への予兆（予想?）を提示し、これまでの「生の保障」の歴史的水準を攪乱させる問題喚起力を持ち、「もはやない」地平から「まだない」地平への媒介となりうるような想像力の強度をもたなければならず、その意味において途方もない／とてつもない私・たち側からのいわば「社会契約」とでもいうべきものの提示に、連なるものでありたい。〈註〉

例えば、「雇用の不安定－安定」／「社会保障・社会福祉の縮減－拡大」／「社会的底辺層の排除－包摂」／『『ポスト福祉国家』＝『福祉国家』のネオリベリズム的改編 『第3の道』的修正』——このような二項対立の枠の外で、前項に追いつめられて後項へといった受動性を否定する能動性において、私・たちの「生の保障」の再＝定義は始まるだろうし、それは、私・たちの「生の自律／生の自己＝共同価値化」への希求に染め上げられたものになるだろう。——この希求とは、この「通信」の冒頭の「発端」の部分でふれたことに即していえば、「路頭」の〈街頭〉への転化→〈街頭〉の励起→噴出する〈街頭〉を遠く生き／行きぬけようとする欲求……と連鎖するその欲求に他な

らない。

私・たちは、「大行進」と「生の保障」研究団の営みを^{いっつい}一対のものとして押し進めることを企図しているのだが、その一対のものとして進めるということの内実は、次のようなサイクルを形成することを意味する。「大行進」が「生の保障」の再＝定義の営みをまねきよせ、その「再定義」がこの「社会なき社会」において進行する「生の保障」の破壊——「社会的排除」の実態に対する「監視」団の営みをつきだし、その「監視」団の営みが個々の「生の保障」の請求者が「要求」者になりかわることを媒介する「生の保障」をめぐる「要求者組合」を生起させ、その「要求者組合」が「大行進」で自らを表現するというサイクル。このようなサイクルが回転することによって初めて、私・たちは、ひとつの〈生・労働・運動〉を生起させることになるのであり、それこそが、私・たちの「政治」ということになるだろう。

そして、それがある質量・強度を超えると、……と、私・たちは自らの〈夢〉を遠くまではせることもできるだろう。「夢見つつ深く植えよ」——この悪しき時代——ここでの文脈に即して最後にそれを言いかえれば、「生き抜くことがそのまま闘いであるような時代」（湯浅誠）——に、このように夢見ることは、私たちの不幸なのか、それとも幸福なのだろうか。私・たちは、そのことに決着をつけるところにまで、よく歩きつくすることができるだろうか？

〈註〉 この間、私・たちの周囲で浮上し、私・たちも「大行進」の最初の試みで掲げた「基本所得」構想は、まさに「生の保障」の再＝定義をうながすものであると、言って良い。「基本所得」構想のそのような問題喚起力については、雑誌「VOL・02」（07.5以文社）の特集参照。

※『もうたくさんだ！大行進』／『生の保障』研究団 通信・1」（07.6月）より

Ⅲ. 「通信・1」への補註

编者註：『生の保障』研究団 通信・1」では、「生・労働・運動ネット」のメンバーによる「もうたくさんだ！大行進」の報告を掲載しました。以下は、「Ⅰ.」「Ⅱ.」及びその報告に対する「補註」として書かれたものです。「通信・Ⅰ」の「報告」も併せてご覧いただければ幸いです。

「通信・1」でふれた私・たちの「もうたくさんだ！大行進」及び「生の保障」研究団について、その舌足らずなところを、少しでも補うことを試みておきたい。——なお、その際可能な限り、このたびの私・たちの企てとかがかわって、私・たちを触発しているいくつかの言説・概念の〈引用〉を通じて、それを試みしてみる。そのことで、私・たち

の小さな企てが、この世界の「ストリート群島」(補註・ii) とどのように接続しようとしているか・接続しているかが、少しでも明らかになればと思う。

〈補註・i〉 — 「通信・1」のP. 9-P. 10の「駅の地下通路を通過、CIC前広場へ」の末尾に

あらためて、言うまでもなく、残念なことに、「もうたくさんだ!」大行進と「世の保障」研究団とを1対のものとして進めようという私・たちの思いは、その思いの主観的な強さとは別に、この「社会なき社会」とでも言うべき状況の中の発語されざる、なお〈声〉とならぬきしみをかかえる身体を生きる様々な人々との生の〈出会い〉を欠くことにおいて、いちじるしい。——私・たちは近年、私・たちの生きる地域においてもくり返される地方自治体当局と「ホームレス」の人々との間でくりひろげられているいわゆる「いたちごっこ」(*₁)に介入することを、なおなしえていない。私・たちは、今回の「大行進」に参加はしたあるいは参加は出来なかったが「大行進」に批判を投げかけた「精神障害」者の今日の「医療」・「福祉」への「もうたくさんだ!」という〈声〉にならぬ〈声〉を聞き分けることを、なおなしえていない。(*₂)——代弁するのではなく、包摂していると思ひこむのでもなく、様々な生を生きる人々との生の〈出会い〉の累積の中から、様々な「生の保障」の再=定義の交錯をはかることへ向けて、私・たちは、私・たちの試み・企てを、くり返し点検し直さなければならない。——

(*₁)「情報の提供」を依頼されたことを契機に行った富山市の「ホームレス」対策についてのききとりを今「通信」の末尾に掲載する。

(*₂)「就労支援」をうたう「障害者自立支援法」の施行に伴い、いわゆる「福祉的就労」の「解消」(?!)へ向けて、厚生労働省の指導の下に富山県でも「工賃向上支援検討委員会」なるものを発足させた。これについても若干の「ききとり」を行ったが、詳細は次号の「通信」でふれる予定。

〈補註・ii〉 — 「通信・1」のP. 2の下から5行目の末尾に

4月にスタートした私・たちの「大行進」が、極めてささやかなものであり、とうてい各地で進められている営みに相呼応するなどとは、言えないものであることは、すでにふれた。そうであるとはいえ、私の背中を「大行進」の企ての方へ押している私の身体が感じている予兆は、世界大の「ストリート群島」への感応の内にあるものだということを、(私・たちの「企て」がよくその「群島」との「接続」を果たしているかは別に)あらためて付け加えておきたい。——「ストリート群島」とは、「異なる社会や文化のもとにある、これまた様々な異なる街路の間には、見えにくいせよ、たくさんのつながりがあり、「この接続をたどるために、この惑星上にある様々な街路をお互いに『群島』としてとらえ」たものである。「『群島』という視点の設定によって見えてくること、それは原理や理想にそうたインターナショナリズムを夢見る普遍性でも、グ

ローバリズム資本主義の均質な一般性でもない。」それは「それぞれが特異であるのに、何か共通なものを志向するという動き（ダイナミクス）のことである。」あらためて、いうまでもなく「この世界を変容に導くような、モノと人の出会いや交通、言葉と身振りのパフォーマンスな組み替え、つまり台本も振り付けもないのに、お互いに連動しあうような生がありうる。」その「様々動きのつながりや接続を意志的に作っていくために、この『群島』という概念は呼び出されている」のである。（上野俊哉「ストリート群島 世界を変える言葉を探して」（『世界』05・9から））

〈補註・iii〉——「通信・1」のP3の前ページから続く段落の末尾に

以上でふれた「遠い〈出来事〉」が〈68〉年をさしていることをあらためて言うまでもないだろう。むろん、今ここで、〈68〉年の〈出来事〉性を手放しで、むじゃきに、述べ立てることをしようとしているのではない。私が〈出来事〉なる概念を持ちだしてきたのは、ひとえに、この列島社会のあちこちでくりひろげられている〈生・労働・運動〉の群れの出現・営みが、まさに〈出来事〉として出来（しゅったい）しつつあり、私・たちの企てもまた、その小さな1分子であろうとするものだということを、臆面もなく言いつのりたいたからに他ならない。——少し長くなるが〈68年5月〉にふれて「出来事」とは何かを展開しているドゥルーズ+ガタリを使ってみよう。

「むしろ68年5月はいかなる通常の——あるいは規範的な——因果関係から解き放たれた純粋な出来事に属する……。68年には、実に多くの騒乱、思わせぶりな身振りや発現、そして愚かな行為や幻想といったものが出現したのだが、そんなことは大して重要ではない。重要なことは、68年5月に、ある透視力が出現したということ、この現象である。あたかも、ひとつの社会がそこに含まれている何か許し難いものを突如として見だし、さらにそれとは別の可能性を見だしもしたかのように。それは、『可能なものを求めよう、さもなければ窒息してしまう……』という形をとって現れた集合的現象である。」

「可能なものは予め存在しているのではなくて、出来事によって創り出されるのだ。それは生についての問いである。出来事は新たな存在を創り出し、新たな主体性（身体、時間、性、環境、文化、労働などとの新たな関係）を産出するのだ。ある社会的変異＝変移が現れたとき、その結果や影響を政治的経済的因果関係の線にそって引き出すだけでは十分ではない。社会がこの新たな主体性と対応する集団的アレンジメントを形成できなければならない。それも、この新たな主体性とその変異＝変移を望む仕方である。これこそが紛れもなく『転移』と呼びうるものである。」（「68年5月革命は起こらなかった」（杉村昌昭訳。「狂人の二つの体制1983——1995」河出書房

・ 0 4 所収))

〈補註・iv〉 — 「通信・1」のP18の前ページから続く段落の末尾に

すでに繰り返しふれたように、私・たちは「大行進」と「生の保障」研究団を一对のものとして進め、それらをひとつのサイクルとして回転させることを、私・たちの課題としている。その課題を果たす営みの核心をなす「生の保障」の再＝定義とは何かにかかわって、ここで敢えて蛇足のように、以下のことを付け加えておきたい。

先に〈引用〉したドゥルーズ＋ガタリに即して言えば、「生の保障」の再＝定義とは「あたかも、ひとつの社会がそこに含まれている何か許し難いものを突如として見だし、さらにそれとは別の可能性を見だしもしたかのように」立ち上がってくるものだ。何よりも「変移していく状況の真っ直中で、『許し難いこと』をとらえる、自らも生成変化の直中にある知覚」(水島一憲「市民のミスエデュケーション」(「現代思想」99・5所収))がざわざわと波立つことから始まり、「新たな主体性(身体、時間、性、環境、文化、労働などの新たな関係)を産出する」ことへいたる。その意味において「生の保障」を「許し難い」縮退・変形においつめる「圧政への抵抗」(水島・同上)こそが「生の保障」の再＝定義なのだ。——なお、「圧政への抵抗」とは、あらためて言うまでもなく「人間と市民の諸権利の宣言」の第2条からとられたものだが、上でのそれを含む〈引用〉源(水島・同上)において、その「圧政への抵抗」が同じ第2条の「安全」との「相関的結合関係において把握されるべきである」と指摘されている。このことは、ここで問題にしている「生の保障」の再＝定義にとって、極めて重要な指摘であることに、注意しておきたい。すなわち、同「宣言」第2条の「安全」とは、「市民自らが確保する安全(sûreté)であって、「少なく見積もっても、財産の安全から法律不遡及の原則を介して、個人的な安全と幸福、そして生存の安全にいたるまでの広がり」を有しており、「国家が市民に対して保障する、セキュリティとしての『保安＝安全保障』ではない」、「市民たちが自己設立する国家からそれを受け取る時に『安全』はセキュリティとしての『保安』に転じる」(水島・同上)。同じことがセキュリティとしての「社会保障」について成り立つことはいうまでもないだろう。(水島・同上では、さらに「社会保障」が「社会的国民国家」において成立してきたことの指摘がなされ、そこから、「人権のポリティクス」の問題が提起されている。)

〈補註・v〉 — 「通信・1」のP8の「今回作成したのぼり旗」に転付

さらに蛇足を重ねることになるが、私・たちは、このたびの「大行進」で「私たちを生きさせろ！」ということばを多用したが、それがこの間「生の保障」の破壊に抗って、身を挺して「生の保障」の再＝定義を生きわたろうと疾走している雨宮処凛「生きさせろ！」(太田出版07)からの〈引用〉であることを、あらためて断るまでもないだろう。一見その何とも不思議な語法がそれじたい「生の保障」破壊にあえぐ者たちの吐息のようなものの〈引用〉であるのだろうが、極めてアクチュアルなおいを発しており、

未生の「生の保障」についての想像力を喚起しているように、見える。ただ、この「発語」については、注意すべき隘路のようなものが立ちはだかっていることに、注意したい。——例えば、私・たちの内のある者・たちは、「大行進」の取り組みの一方で、私・たちの地域で生じた「射水病院人工呼吸器取り外し事件」の究明に取り組んでいるが、その過程で、医療現場で進行している様々な「生かさないうこと」のありようから、いわゆる「安楽死」ととらえかえそうとする試み（美馬達哉「生かさないうことの現象学」—「身体をめぐるレッスン2 『資源としての身体』」（岩波07所収）に出会った。その試みにふれる中で「生かさないう」に対して私・たちは何を対置すべきなのかを論議する機会があり、その折にとりあえず、私・たちとしては、「生キサセロ」を対置したいが、正確には、「生キーサセロ」と表現すべきではないかというところにたどり着いた。上でふれた雨宮「生キサセロ」発の「生キサセロ」についても同様の問題があるというて良い。この「生キサセロ」をめぐる問題のありかをたんてきに取り出すなら、それはフーコーの「生権力」という概念、つまり、フーコーのいう「死なせるか生きるままにしておくという古い権力」に代わって現れた、「生キサセロか死の中に廃棄するかという権力」の内の「生キサセロ」とは何かという問題に他ならない。——この点については、市野川容孝+酒井隆史の「社会的なものの潜勢力」という対談（「現代思想」07・9）の中でも言及されており、そこで、酒井は「『生キサセロ』というのとはもっと厳密に捉えなくてはいけないかもしれませんね。『生キサセロ』というのとは本当に権力の中でしか生きることが出来ないようにしてしまうということかもしれません。生きる環境そのものを構成し、かつそこでしか生きられないようにする。文字通り『生キサセロ』という。そして、その論議の最後を次のようにしめくくっている。「『社会の貧困』の極限、生のいわばゼロ地点で生存を開くセキュリティを分泌する集団性のミニマムこそが、新しい社会的なものの構想のための出発点に設定すべき場所ではないか」。ここでいわれる「場所」こそ、まさに私たちの共同の「生の保障」の再=定義が立ち上がる場所であるだろう。その点をふまえて、私・たちをかりたてている「生キサセロ」なる不可思議な語法をさらに転成させていくことが、現在ただ今私・たちに課せられていることではないだろうか。——『「仕事よこせ！」ではなく『生キサセロ！』この不安定さがはらむ可能性と不可能性の中から国民国家を超える、どんな社会構成を発明できるのか。ボロボロの切れ端でもいいから、それをつかみたい』（平井玄「『未来形の挑発』を」（「図書新聞」07・6・16所収）と、私・たちも心の底から思っているのだから。

※「『もうたくさんだ！大行進』／『生の保障』研究団 通信・2」（07. 10月）より

ご案内
「もうたくさんだ！」大行進
 日時 4月28日(土)午前8時45分
 富山市総合体育館南側出入口
 (いたち川側)に集合してください
 午前10時30分 瑞水公園広場出発
 (解散 富山城址公園)
 ぜひ、あなた自身のユニークなアイデア
 やスローガンをおもちゃってください。

生・労働・運動 net jammers

富山市神通町3-5-3 神通大橋東詰
 TEL 076-441-7843 FAX 0766-444-6093
 URL <http://net-jammers.net>
 E-mail: jammers@net-jammers.net

こちら「もうたくさんだ！」大行進
 応答願います



(尾藤 豊 作品集)から

(「もうたくさんだ！大行進」
 を呼びかける二つ折りビラ
 左は表 下が裏)

「もうたくさんだ！」大行進

——「窮鼠(追いつめられたネズミ)の乱の始まりへ
 キュウソ

参加される人は、4月28日(土)8時45分、富山市総合体育館南側出入口(いたち川側)に集合して下さい。

「雇用」は不安定、「福祉」は不十分どころではなく、大きくゆれる生きることを支える「社会的きずな」。生活は「貧困」に押しつぶされ、存在そのものが「切り捨て」られ、「排除」されそうになっている。しかも、まわりからは「それは全て『自己責任』だ」と、きめつけられる。

私たちの身体は、日ごとに、「もうたくさんだ!」「もうがまんできない!」と叫んでアパレタイという思いで、染め上げられています。

「もうたくさんだ!」「もうがまんできない!」——〈なに〉について思うのかは、私とあなたとで、同じでないかもしれませんが。それでも、それを〈声〉にしたい、〈叫び〉にしたい、身体全体であらわしたい、そのことで「私ハコソニ生キテイル」と示したいということでは、同じではないか、と思います。

そこで始めます。5月1日は、「労働者の祭典(メーデー)」です。(今年4月28日(土))この日・この機会に「こちら『もうたくさんだ!』大行進、応答願います」と、「大行進」しながら、この社会に「ナメラレツパナシデタマルカ」と〈発信〉することを始めます。例えば次のように**もうたくさんだ!」「自己責任」論 私を自由に生きさせろ!**。あなたも、あなたが「もうたくさんだ!」「もうがまんできない!」と思う〈こと・もの〉をもって参加しませんか?

ちなみに、ここで「私たち」と言っているのは、「『窮鼠(追いつめられたネズミ)組』」のことで、この「大行進」は、「窮鼠(追いつめられたネズミ)」「猫ならぬ犬を、はむ「乱」の始まりです。

「もうたくさんだ!」大行進」と「生の保障研究団」とを**一対のものとして、進めることを計画しています**

「生の保障研究団」——それぞれの人が「もうたくさんだ!もうがまんできない」と思う〈こと・もの〉は、いろいろでしょう。しかし、それらの多様な〈こと・もの〉をつらぬく思いのひとつは、きっと「私を自由に生きさせろ!——生の無条件の保障を!」というテーマに集約できるだろう、と思います。このテーマを多様な角度から「学習/調査/研究」すること、それが「研究団」です。

その活動を通じて、一方で「生の保障」どころか、私たちをその枠外に押し出す「社会的排除」の実態を追及・監視する「社会的排除監視団」、他方でその実態を批判することから、さらに一歩踏みだして「生の保障」の実現に向けて「生の保障」要求者組合」を立ち上げることを、めざします。



2007年4月28日 もうたくさんだ!大行進 横断幕

渋谷 望 ネオリベリズム的遠近法をこえて ——生が運動になるとき——

07年度からスタートした「アンラーニングプロジェクト」は、その第Ⅰ期・「現代日本社会を問いなおす」を終え、秋から第Ⅱ期・「出^{しゅったい}来しつつあるアクション群」に入った。その第1回として、渋谷望さんを招いて、「ネオリベリズム的遠近法を超えて——「生が運動になるとき」というタイトルで、トークしてもらった。

以下は、それを収録したものである。忙しいところを時間を割いて富山までおいでいただいた渋谷さんに、あらためてお礼を申し上げる。なお以下の文中の〈註〉は、渋谷さんの了解を得て、「アンラーニングプロジェクト」の担当者が付したものである。

■ はじめに

ご紹介にあずかりました渋谷です。

実は何年かぶりかで、お会いする方もいるかと思えます。2003年5月にこちらによばれて話したことがあります。

今回は「ネオリベリズム的遠近法を超えて」というテーマで、どちらかという運動の話をしてくれということなので用意してきたんですが、

あまりそういう話というのはこういう公の場で話したことがないというか話しづらいのですが、まとまっていないけど、今日は全体で3つぐらいのセクションに分けて話そうかと思えます。



□ ダメ連との出会い

2000年ぐらいから個人的に関わってきたというか、見聞きしてきたことをお話ししようと思ってきたんですが、先ほどこちらに着いてからもっと前の話をしてくれといわれました。そうなるとう本当に個人的な話になってしまいますのですが、そういうこともちょっと付け加えつつ話そうかと思えます。

まず、「反・ネオリベリズム」という言葉は、ぼくらは90年代の後半ぐらいから意識して使うようになっていたんですが、その言葉が社会の中で認知されない時期と

いうのを経験して、その中でいろんなことを考えてきました。(*1)

そのころ僕は、早稲田大学の大学院にいて、それから助手をやっていた時期に、友人の酒井隆史らと一緒に勉強会を組織しながら、やってました。(*2) 80年代の頃の僕は、まったきノンポリというか運動というものにコミットしてない、しょうもない学生だったのです。90年代になって早稲田に入っても、大学院ではろくな勉強はしなかったのですが、その中で一番影響を受けたのが酒井隆史と、道場親信という最近本を出した友人です。(*3) その連中が「ダメ連」というなんと形容していいかわからない、一言で言うと変態チックな人たちとつきあっていたのです。(笑)

彼らとは同じ早稲田出身で、大体同じぐらいの年齢です。彼らがどんなことをやっていたかという、実質上何もやっていなくてひたすら「交流」をしていた。「交流」というのは彼らがよく使う言葉なのですが、デモに行ったりする運動があるとすると、そのデモが終わった後で交流会がありますね。その交流会だけをめざすのが彼らなのです。デモとかはどうでも良くて、それが終わってから駆けつけてきて、何かをおごってもら。それを彼らは「交流」と呼んでいた。(笑) 具体的に名前を挙げてもしようがないと言えばしょうがないのですが、その中にペペ長谷川というのと神長恒一という二人がいます。彼らとその仲間は、デモの後の「交流会」だけではなくて、僕らがやっていた勉強会のところにも群れをなしてやってきてミニコミ、当時彼らは一人一冊ずつ作っていて、そのミニコミを名刺代わりに売りつけるということをやっていた。いわば「交流文化」とでも言うような活動です。そういう彼らの活動は、いろんな運動のポイントポイントの動きをつなげる、いわばネットワークの機能を持っていて、僕も彼らを通していろんな運動に紹介されるというか、何となくいろんなところに首をつっこむようになって、そこから、そんなたいしたことはやってないのですが、自分の「運動歴」というようなものが始まったわけなのです。本当は彼らの話を彼らから直接聞くのがいいと思います。(*4)

ただ「ダメ連」というのはもう事実上、開店休業ですが、早稲田に行くと、当時彼らがやっていた、今もやっている「あかね」という喫茶店というか飲み屋があります。週代わりで、ボランティアで働いていて、その曜日の担当者が（そこで）トークイベントであるとか、学習会であるとかを企画して今でもやっています。

そんなことを経験してきて、僕にとっては運動の強度というかおもしろさのようなものに触れたのだと思います。そのころの、そのあたりの運動の勢いともいうものを見てみたいという人がいたら、「現代思想」という雑誌の97年の5月号に「ストリート・カルチャー」という特集があります。その雑誌は普段はわりとアカデミックなコンテキストで、フーコーがどうのこうのということなどが載っているのですが、そこにいきなり神長恒一くんの「ダメ連宣言」というのが載っていて「働かなくてもいいじゃないか」とか「ハクやウダツというものはもう求めなくてもいい」というコンナノアリカという文章が特集されています。ぜひ見てください。(*5)

この「ダメ連」のことでは、あんまり言っちゃイケナイかなというのがありまして、彼らは女性受けがあまり良くないのです。(笑) それにはいろんな理由があるのですが、開き直っているところもあったりして、それでカップルになったら、要するに彼女を作ったら「裏切り者」になってしまうというハードルの高いところでした。

僕は「ダメ連」だと名乗ったことは一度もないのだけど、何かすごくリクルートされて「渋谷さん素質ありますよ」「もてないでしょう」って。もてないことが資質らしいので、ほめられているのだから、なんだかよくわからないということもありました。そういう「ダメ連」だったのですけれど、最近「ダメ連」の人たちが持っていたいわゆる「脱力的」作風が、例えばこれからちょっとだけビデオで紹介する「素人の乱」というのが結構ブレイクしていて「論座」などに出てきますが、ああいった人たちに受け継がれているのだと思います。「ダメ連」の話はそんなところで、そこから後のところはメモみたいなものに箇条書きしてきました。

1 反ネオリベ運動見聞録

□1 - 1 2001年早稲田地下部室運動・空間開放

2000年代に入ってから僕が個人的に関わったこと、あるいは見聞きしてきた「反ネオリベ」と言っているかどうかはよくわかりませんが、そういったことをあげてみました。

まず最初の2001年、早稲田地下部室運動・空間解放ですが、いろんなことを考えさせられたという意味で大きかったことです。地下のサークル部室利用を早稲田大学当局がそれまで容認してきたので、「自主管理」という形でいろいろに利用してきました。それを、大学当局が、これから「グローバルユニバーシティ」になるんだから、地下のところで気持ちの悪い人たちがいるというのは、非常に印象が悪いということで、追い立てを企ててきました。それに反対する運動が2001年にありました。当時、僕は非常勤で早稲田に行っていたのですが、なぜか「教員」なのに、学生と一緒にあって、ガタガタ抵抗を試みました。(*6)

□1 - 2 イラク反戦サウンドデモ

これは実はかなりローカルな文脈なのですが、有名になったのはイラク反戦デモの時からです。これはもう全世界に広まったし、日本でも久々に大きな動きになりました。「サウンドデモ」という、大きなスピーカーを繰り出して音楽を流してやるデモのスタイルが、この時初めて登場したのですが、そこにも出入りしていただきました。こ

のスタイルは、その後の日本の反ネオリベデモに広まっていきました。そういうデモのいわば出発点として重要だったようではありますけれども、実はこれはけっこういろんな問題をはらんでいました。

日本での「イラク反戦」の動きの中では、「パレード」というか、お上品なデモがけっこうはやっていて、そこからはじかれた人間、血気盛んな若者が、はねて逮捕されたということもありました。そういう若者達は、お上品なデモやパレードとは別の運動のあり方を同時に模索していたのだと思います。（*7）

□1 - 3 反戦落書き

そこから、「反戦落書き」事件というものが「発生」するようなこともありました。杉並区の公園の公衆便所の外壁に汚い字で「反戦スペクタクル」と書いた若者がいて、それが「器物損壊」ではなくて「建造物破壊」ということで検挙されてしまうという事件があって、それがサウンドデモとつながっていく面があります。（*8）

□1 - 4 クルド難民支援

それから、2004年に「クルド難民支援」という座り込みデモがありました。これは新聞とかでご存じな方もいらっしゃるのではないかと思います。トルコからクルド人が日本への「難民申請」をしに来たのですが、却下されたということでいろいろな動きがありました。彼らは何をしたかということ、青山に「国連大学」というのがあるんですが、「国連高等難民弁務官事務所」があります。そこの前の広場に立てこもって、国連に向けて、まあ同時に日本人に向けてなんですけれども、「何で難民として認定できないのか」ということを訴えて座り込みを始めて、1ヶ月ぐらい続けるんですが、そういう何というかファンキーな運動がありました。

これに何で惹かれたかと言うと、当時、難民申請者自身がカミングアウトして顔をさらけ出して「何で難民申請を許可しないのか」と批判をするということは、非常に勇気がいるわけです。近くに大使館もありますから、彼らにも当然知られてしまうわけですよ。ですから非常に新しいと同時に勇気ある行動だったと思います。これは今、ビルマの大使館に行っているビルマ人もやっていることですが、本国政府に顔を知られると、相手は軍事政府であるわけですから、命がけのことなんです。これは、いわば庇護希望者自身による当事者運動という新しい動きであったと思います。これが反ネオリベ運動になるかどうかというのは、分からないわけではありますけれども、そのことは、何をもってネオリベあるいは反ネオリベというかにかかっているとも思います。この話にはまた後で言及したいと思います。（*9）

□1 - 5 「素人の乱」と「オーストラリアでの経験」から

それから、「素人の乱」・「オーストラリアの経験から」と書いておいたことですが、オーストラリアの経験から先に言いますと、これは個人的な話で恐縮なのですが、2005年の後半から2006年にかけて、半年間、在外研修ということでオーストラリアに行きました。そこで何をやったかという、あんまり勉強はしなくて、向こうのアクティビストというかアナーキストは、結構いろいろなネットワークを持っていて、たまたまそこにコミットしていた友人が向こうにいたので、彼女の紹介というのもあって、そこで遊んでばかりいました。それが結構運動のあり方という点では、非常に面白かったし、もっと広い意味で言うと社会のあり方というか、生活の仕方というか、そういうところでかなり人生観が変わったように思いました。本当に向こうは、人が明るいです。それに驚かされました。それが、日本に帰ってくると、日本人は暗い。向こうでは普通に話しかけて来るんです。電車とか乗っているときとか、困った様子でいると助けてくれるというような、公共性というのが身体のレベルで根づいている気がします。公共空間が普通のレベルで維持されているということに感動しました。

ちょうど向こうへ行ったら、シドニーのオペラハウスで「フォーブス (Forbes)」という雑誌が主催する、世界の経営者のトップを集めて、何年に一回の会議をやるというタイミングでした。それに対する反対のデモが組織されて、じつはそれに間に合わせようとして向こうに行ったんですが、反対デモの準備段階から参加して、なるほどこういう風に抗議デモを組織するのかということが、いろいろ分かり、非常に参考になりました。

その映像と、あと、「素人の乱」の映像を、今ちょっと紹介することにしたいと思います。ご存じの方もいらっしゃると思うのですが、高円寺に「素人の乱」というリサイクルショップがあります。これも2005年だったかな、松本哉さんという元「法政大学の貧乏くささを守る会」という所にいた人が、退学処分されて、高円寺の商店街にリサイクルショップをオープンしたのです。それまで割と閑散とした商店街だったのですが、そこでリサイクルショップを開くと、だんだん人が集まってきて、「カフェ」をやったり、「ネットラジオ」をやったり、古着屋をやったりと、楽しそうにいろんなことをやり始めました。そういう彼らが、2006年の9月に家賃廃止デモというのを組織して、そのデモが面白いのでそれを見てもらおうと思っています。「貧乏くささを守る会」も非常におもしろいのですけれども。

その彼が、今年の4月に杉並区の議員に立候補して、惜しくもというか、当然というか、落選しました。でも、供託金を取られずに一定数が取れたので勝利宣言をしたのですけれど、その「選挙運動」もすごいおもしろい。「選挙運動」だと警察も手を出せない。高円寺の駅前にサウンドシステムを持ち込んで、連日連夜音楽をかけて、それを目当てに若者が集まって、ライブをやって、警察が手を出せないという、ある種の解放区を作ったのです。そこには僕は行けなかったのですが、参加していた人の話によると「本当に楽しかった」ということです。

彼らは常に、変化球を得意としているんですね。あと、デモ申請に、「100人来ます」って出して、本当に来たのが5人。警官は何十人もいるので、しょうがないから5人を囲んで歩くと、警官のデモみたいになっちゃったとか、そういうおもしろいことをやっている人たちなんですけれども、その映像を持ってきました。その二つをちょっとこれから見てもらいます。(*10)

□ビデオ映像

高円寺の公園でのライブ

サウンドデモ

オーストラリアでのリクレイム・ザ・ストリートの運動

2 「ネオリベ的遠近法」をどこで超えるか

□2 - 0 「無条件の生の肯定」をネオリベ批判の出発点に

いろいろととりとめのない話をしてきましたが、「ネオリベ的遠近法を越える」ということについて僕が言いたいことは、要するに運動が「楽しげ」だということが重要だということに尽きると思います。「ダメ連」にしても普通の運動でやっているようなデモが苦痛でしょうがないから、交流会にだけやってくるというように、まじめに運動をやっている人からすると中途半端で、東京では嫌っている人も多いんですが、「楽しくやる」というのが重要で、そのような運動の「楽しさ」をいかに積極的に肯定し、拡大するかということから次の展開が見えてくるし、そこから逆に、ネオリベというものが何なのかということが照らし出されるのではないかと思います。

少し唐突な言い方かもしれませんが、ネオリベというのは「条件付きの生しか認めない」ということであり、言い換えれば、ネオリベを批判するということは、「無条件に生を肯定する」ことなのではないかと思います。僕が関わってきた運動を見ていても、「生を無条件に肯定する」ということが根底にあるのではないかと思います。そのようにとらえることによって、ネオリベといわゆる保守主義のどちらも、人間の「生」を条件つきでしか認めていないということが明らかになるように思います。

今日の話のレジメに"There is No Alternative" と書きましたが、「ネオリベ的遠近法」とはどんなものであるかは、この言葉に端的に表れているように思います。これはサッチャーがよく言っていた言葉とされているんですが、つまり、「この世界にはもうネオリベしかない。他にオルタナティブはない」ということです。この言葉は、ネオリベとはどんなものかを言い表すための標語のようになってしまっていて、略して"TINA"とも言いいますが、結構有名なスローガンです。このような世界観をいかに

超えるのかというのが重要で、今まさにそのことが問われているように思います。

日本の現状に即して考えてみても、例えばネオリベ批判というのが、しばしば保守主義にからめとられてしまうということがよくあります。保守主義といっても何ををもって保守主義と呼ぶのかということは、厳密に言えば本当は難しいことなのでしょうが、ナショナリズムであるとか、もう少しリベラルな日本的経営なども含めて、保守主義と言ってしまってもいいでしょう。要するにネオリベというのは、日本では小泉政権の時代に、ポピュリズム的な言説を組織化することで推進されていったのですが、「ネオリベに反対する奴等は皆抵抗勢力である」というレッテルを貼ることによって、ネオリベ的政治に対する大衆的な支持を集めたわけです。そのような意味で、ネオリベ対「抵抗勢力」という図式自体が、「ネオリベ的な遠近法」ということになりますし、そうだとすれば、やはり、そのような地平をどう乗り越えるかということが問われているように思います。

僕があえて、『反ネオリベ』とは生の無条件の肯定である」と言うのは、そのようにとらえることによって、ネオリベもいわゆる保守主義もどちらも「生」を条件つきでしか認めていないということが見えてくるからです。ネオリベは、「自立心」や「労働意欲」、あるいは、ちょっと前までは「チャレンジ精神」や「競争心」といった、ある種のモラルをもつ限りにおいて、「あなたを救済します」とか、「あなたは生きる価値があります」と言うわけです。だから逆に言えば、そういうモラルがないとされる人は、「あなたは生きていてもしょうがない」と一方的に断罪されてしまいます。それでは、いわゆる保守主義や日本的経営、戦後的支配体制といったものが本当にネオリベに対立するものであるのかといえば、やはりそうではなくて、それらもやはり「ナショナリズムに貢献する限りは」とか、「企業社会に貢献する限りは」といったいろんな条件を前提にした上で人間の生を認めてきたのだし、逆に言うとそのような条件にそぐわない生き方をする人を排除するものでした。そういう条件を抜きにして、いかに自分たちの生を肯定するのかということが、「ネオリベリズム的遠近法をこえる」と言う時に問われることなのではないかと思います。

□2 - 1 「スペクタクル社会批判」からネオリベを撃つ

「ネオリベリズム的遠近法をこえる」と言う時の、もう一つの重要なポイントであると思うのは、「スペクタクル社会批判」ということなのですが、先ほど紹介した「反戦落書き」事件の当事者が公園のトイレの壁に書いた言葉が、この「スペクタクル社会」という言葉です。解説的に言うと、「スペクタクル社会」というのは、ギー・ドゥボールというフランスのアナキスト「シチュアシオニスト・インターナショナル」というグループを組織していた人が、現代資本主義社会の批判のためのキーワードとして使っていた言葉です。「スペクタクル社会」とは、イメージや「商品」を媒

介とした生を人間が生きざるを得ないという社会のあり方を指しています。この社会はナショナリズム的な言説などの、いろんなイメージによって一見、統一的であるかのように見えるかも知れないが、それはあくまでも「擬似的」な統一性に過ぎない。イメージや商品を媒介にしているがゆえに人間の生は断片的・孤立的であり、現代社会の中での私たちの生は、直接的な生ではなくて擬似的なイメージを媒介とした、幻想の生に過ぎないということです。（*11）

こんなふうに言ってもよくわからないと思いますが、先ほどふれた「反戦落書き」事件の当事者が、どういう言葉でそのことを表現しているかが興味深いので、彼が裁判所に出した意見陳述書の抜粋を今日のレジメの中に載せました。彼の意見陳述書は、インターネットで全文が読めるので、興味がある人は、ぜひ読んで欲しいと思います。これはたぶん、他の人にも手伝ってもらって書いているのですが、裁判ではどうせ勝てる見込みがないんだから開き直って言いたいことを全部言ってやるという開き直りの文章で、それだから面白いんですが。

その中で彼は、「私の家庭は、酪農と畑作を営んでいます。親は疲れすぎて、仕事が終わった後は食事をとり、風呂に入り、そして寝る。疲れすぎて、それ以外何もできないのだ」と言っています。その次がすごいんです。「でも私の家は金持ちだ。家は豪邸で、地下も合わせて3階建てだ。部屋は全部で20部屋あり、テレビは9台もある。庭にはふんだんに植木が植え付けられ、鯉を飼っていた。地元では一番の金持ちかもしれない。超高級寿司を車を飛ばして食べに行く。家でも豪華な料理がいつも出て、その後は果物が出た。」

そのような自分の家族の生活について、彼は次のような批判をしています。

「12時間の肉体労働を延々として、稼いだお金でこれも延々と大量消費をする。親はその生活を概ね受け入れていた。確かに仕事はきついがその分こんなにも消費ができる。広義で言って、これは親だけではなく地元の農家全般に言えることだ。はっきり言って地元の農家を労働に駆り立てているのはまぎれもなく『消費』だ。そこに『労働の拒否』という選択枝はおろか発想も無い。私はいつも子どもながらに『みんなそんなに消費しなければ労働する必要は無いのに』と思った。そんな事を親に言う『あんた、一杯いい物食べたり出来るじゃない』と言われた。そんなこんなで親はさらに稼ごうと高額な機械を購入して更に労働する。機械を購入した親が消費というスペクタクルに飼いならされた機械となっていた。」

（K 最終意見陳述 東京地方裁判所11部あて 2003年12月17日より）

この文章からは、彼の心が伝わってくるようですが、要するに「スペクタクル社会」というのは、彼にとっては「商品を媒介とした生」であるということなのです。それに対していかに直接的な生を獲得するかというのが、その後の彼の生きる上での大きなテーマとなるのですが、その過程が彼の最終意見陳述書の中にずっと述べられています。

戦後の日本の高度成長下で、企業と従業員が一丸となって、追いつけ追い越せで経済発展を追い求めるという「プロジェクトX」的な物語があるわけです。しばしばネオリベを批判する人たちは、戦後日本社会をノスタルジックに見てしまいますが、その戦後社会もそのような意味で、一種の「スペクタクル社会」であり、大量消費社会で、直接的な生ではなく、擬似的・断片的な生であると批判することができるでしょう。それに対立するものとされるネオリベリズムも、同様に、「スペクタクル社会」であるという批判ができるわけです。このように、消費やイメージを媒介とした生き方にノンを突きつけるというのが、「スペクタクル社会批判」であり、そこに「ネオリベ的遠近法」を越える一つの手がかりがあるように思います。

□2 - 2 「自立」と The Common 〈共〉

それからもうひとつは、「レジメ」の2-2で書いた、もう一つのネオリベ批判の糸口として、「自立」イデオロギーをいかに批判するかということです。福祉国家を批判するとき、「自立」とか「自助」という言葉が使われますが、それに対して、「自立」していないのはどっちだという問いかけることは、結構有効なのではと思っています。

たとえば、「ニート」や「引きこもり」が、「自立」していないといわれていますが、「自立」して社会人になって働いている人たちも、親からマンション購入の頭金を出してもらっていることもあるだろうし、どっちも「パラサイト」には違いがないということがあります。そういう批判はちくちくとやっていくことが重要だと思います。

最近出たもので、ロビン・ケリーの「ゲッターを捏造する」という本があるのですが、ここでの議論が興味深い。ロビン・ケリーはアフリカンアメリカンの研究者です。彼は、黒人のとりわけアンダークラスが、「依存的で、やる気がなく、怠惰だ」と学者のお偉いさんは言うけれども、「ではお前たちはどうなんだ」と言い返すことが重要だと言っています。たとえば、白人のミドルクラスと、黒人のアンダークラスの格差というのはなぜ出てきたのかというと、その一つの要因として、黒人が家を持つ、資産を持つということに対して、不動産屋がすごく警戒し、購入に対して割高な価格設定をしていた。その結果黒人は資産を持つことができず、それに対し、白人は相対的に安い値段で購入することができ、それが戦後ずっと続いてきた。そしてインフレにより資産価値が上がり、その結果、持たざるものと持つものという格差が生まれてきたということです。決してよく働いたとか、働かなかったということが格差の原因ではなく、初期設定の格差や差別がその原因としてあったということが言われています。あるいは、企業ががんばっているというが、よく見ると、連邦政府が補助金を出したり、減税をしたりして、企業を儲けさせている。フェアなところでがんばっているということでは全然ない。「自立」していないという点ではどちらも同じではない

か。問題をひっくり返すということをしなければいけないと言ってます。これは日本の場合であれば、高度成長期にがんばって日本人は働いたのに、それに比べて「フリーター」や「ニート」はなんてやる気がないんだ、という言説にも、「自立してないのはどっちだ」と突きつけることが有効だと思うのです。(*12)

それともう一つ、それとかかわる議論として、The Commonという言葉、翻訳では〈共〉と訳されているのですが、コモンズという言葉は定着していますが、それをより一般化したということなのでしょうか、ハートとネグリが、「マルチチュード」という本で強調しているのですが、The Common〈共〉というのは貧者のほうが生産している。この場合、このThe Commonというのは、社会的なネットワーク、目に見えない価値のことです。いろんなものを作り上げる時必要で、生産に関与している基礎的なもの、社会的な情動、そういうものを指してThe Commonと言ってます。(*13)

たとえば、高祖岩三郎の「ニューヨーク烈伝」、この本はともてもおもしろい本ですが、今まで紹介されていなかった運動が細やかさを持って紹介されているのでおすすめです。(*14) その中で、「庭＝運動」というのがありまして、すごい運動、ラジカルな運動です。何と言ったらよいのか、「ガーデニング」そのものは趣味っぽくてよくわかりませんが、どこでどんな文脈でガーデニングをするかということが重要だということです。

彼ら活動家たちが「庭＝運動」をやったのは、70年代後半のニューヨークで、「脱投資」といってますが、ここはもう価値がないということで資本が引き上げ、野ざらしになった空きビルなどを彼らが占拠（スクワッティング）して、「ガーデニング」をやった。今までドラッグディーラーがのさばっていたところを、緑豊かな野菜を作ったり、人が住める状況にしたり、ビルメンテナンスしていった。肥料や種などのワンセットを空いたビルなどに置いていく、これで君たちもやってみなさいというような運動をしていた。それが「庭＝運動」といわれている。70年代後半から80年代にかけて、ニューヨークが荒れ果てた時代にそういう運動をやっていた。それが、たぶんネグリやハートがいつているThe Common〈共〉ということに近いイメージではないかと思っています。ただ、80年代後半からその地道な運動が実ったということでしょうか。そのおかげで土地の値段がだんだん上がってきたら、再開発の業者が入ってくる。そのとたんに、それまで市が認めていたのに今度は手のひらを返したように、非合法ということになって、「お前ら出て行け」というようになっていったのが、現在の状況だと高祖さんが報告しています。(*15)

要するに、何にも生産していないようなところで、地道なネットワークを作り上げていく、まさに「ガーデニングする＝耕す」というイメージだと思いますが、それが〈共〉の生産であると思います。

「お前達は自立していない、遊びほうけている」というような言説をひっくり返していくときに、このような考え方がありかなと思っています。「素人の乱」などもあ

る意味で社会的なネットワークを多くの貧乏人が集まってつくりあげ、お互いに助け合っているのだから「The Common 〈共〉」を作りあげていると言えるのではないのでしょうか。そのように考えると、「ベーシックインカム」などの議論ともつながってくるのですが、「ベーシックインカム」というのは、生を肯定することの制度的な表現ですから、実際にネグリ等の議論からみると〈共〉を生産していることが「ベーシックインカム」の根拠のひとつになっているということは出来ます。

■ 3 ネオリベ歴史観を超えて——闘争のサイクル or 闘争の世界性

最後に付け足しですが、ネオリベ的な歴史観を超えるということを考えることが出来るのではないかと思います。

ネオリベ的遠近法を超えるということと表裏一体のことですが、ネオリベ的歴史観というのは、ようするに「There Is No Alternative」ということです。90年代以後、冷戦が終わり、ネオリベの状態＝新自由主義が「歴史の終焉」に登場し、市場社会にはこれ以上先がないという歴史観、このような歴史観を無効にするということは、十分あり得るのではないかと思います。

例えば、大きなタイムスパンで考えると、1920年代から60年代までを挟むような形でアナーキストの動きがあるような気がします。結構世界同時的な動きで、少なくとも新自由主義＝ネオリベリズムで終わりというのではなくて——「闘争サイクル」と書きましたけれど——むしろ世界同時的ないろんな闘争が、特に90年代以降に発生していて、これはひとつはアナーキスト的な動きということにかかわっています。こんなふうに考えると、いろいろと希望がわいてきます。

日本では細々とやっているだけのように見えますが、世界に目を転じてみると、実は同じような動きが同時並行的にあるということがわかる。そういうことを最近いろいろところで経験しました。

例えば、難民支援。はじめは、日本での文脈でしか考えていなかったのですが、オーストラリアに行ってみると、難民支援というのはとても大きな活動である。オーストラリアというのは難民をかなり受け入れていて、そこで市民権をとった人たちが、さらにそれを支援するというサイクルが出来ています。

カナダでも難民支援という運動が盛り上がっています。難民自身が難民申請を却下され、事実上法的地位としてはアサイラム・シーカー（庇護希望者）ということになりますが、そんな人々が自分たち自身で運動を組織して、「ノーワン・イズ・イリーガル＝誰も非合法的な者はいない」という運動が出現してします。後で知ったのですが、そのようなカナダ人が日本でクルド難民支援にかかわっていたのです。彼女は、強制送還されてしまったが、実は、そういうコンテクストをグローバルに見ると、世界同時性というか、同時世界性というのがある。そういうことがひとつ大きな希望になる

のではないかと思います。

□ 3-1「米騒動」(1918)→「水平社」

「米騒動」と書いたのは、富山に来たので言及しようと思ったのです。

「米騒動」というのは、ある種のアナーキな動きなのです。もちろん組織化されていたわけではないが、それが引き金となって、例えば「水平社」が出来たということが最近読んだ本に書いてありました。「米騒動」に参加していた被差別部落の人たちが、自分たちの力で、世の中が変わったという経験で自信を得て、「水平社」を組織したということです。上からの温情主義ではなく、自分たちの手で世の中を変えることができるんだというふうに考えていくきっかけになったということのようです。単に米の値段が上がって、食糧難になったから米騒動という話ではなく、その後のアナキスト・アナーキズムの動きにかなり影響を与えたということが言えます。日本の1900年代から20年代のアナーキズム運動を見ていくと結構おもしろいのです。その後、弾圧があって、御存じの通り、アナボル論争などもあって、消えていくというか、潰えていくということになりました。(*16)

□ 3-2 同時代のアメリカのIWW

そういう動きは、同時代のアメリカのIWWが牽引したアナルコサンディカリズム運動があります。「ウオーブリーズ」といわれていますが、たぶん推測になりますが日本と人の行き来があったのではないかと思います。そういうふうに考えると、同時代的なものが1920年代にもあって、今、それが回帰しているのではないか、そこにもひとつ闘争のサイクルが描けるのではないかと思います。

高祖さんの本によると、アメリカのアクティビズムはIWWを再評価して、彼らの運動の作風を、学んでいるようです。オーストラリアでもIWWはリスペクトされていて、バッジになって売られています。ここでも闘争のサイクルがある、ある種のうねりがあるのではないかと思います。(*17)

□ 3-3 反G8

その大きなうねりの一環として、反G8の流れがあり、来年ある「洞爺湖サミット」に向けて、この日本でも今後出てくる流れではないかと思います。どういうふうに闘いが作られていくかは分かりませんが、要塞みたいところにホテルがあって、あんなところにどうやってデモがいけるのかと思いますが、いろいろな取り組みがあると思っています。今後の動きに注目していきたいと思っています。(*18)

まとまりがありませんがこんなところで。

■〈註〉

- *1 酒井隆史「自由論」(青土社・01)の「はじめに」参照
- *2 渋谷望「魂の労働」(青土社・03)の「あとがき」、酒井・同上書の「あとがき」参照
- *3 道場親信「占領と平和〈戦後〉という経験」(青土社・05)——なお道場さんは、戦後—現代日本社会運動史をたんねんにフォローしている。(例えば「インタビュー吉川勇一——ベトナムからイラクへ」及び「『反戦平和』の戦後体験」など(「現代思想」03.6))
- *4 「ダメ連」については、「ダメ連宣言」(作品社・99)、「ダメ連」(河出書房・99)、神長恒一+ペペ長谷川「だめ連の『働かないで生きるには』」(ちくま書房・00)がある。なお「ダメ連」の活動年譜が、3番目の著書の末尾にある。
- *5 「現代思想—特集ストリートカルチャー」(95年5月号)は、日本での「ポスト68」の終わりの始まりを告知するものだといってよいようなものだった。なお、この点については、毛利嘉孝「対抗的90年代」(「現代思想—特集1990年代論」05年12月号)参照。
- *6 この問題については、平井玄×酒井隆史「管理をぶっとばせ、」(図書新聞03.7.8)参照。また、同じ号に収録されている「早稲田で今、何が起きているか」参照。さらに、その後の早稲田大学の状況については、桂秀美・花崎攻之輔編「ネオリベリズム化する公共圏」(明石書店・06)参照。
- *7 「サウンドデモ」については、野田勉×三田各×水越真紀「ダンス・トゥ・デモンストレーション」(「現代思想」03・6月号)、イルコモンズ「××××ザ・サウンドデモ2003」(「情況別冊」2004・3月号)、小田マサノリ他「東京サウンドデモ会議」(「音の力・〈ストリート〉占拠編」インパクト出版会05)、「踊らされるな、自分で踊れ—関西サウンドデモ座談会」(同上)など参照。また、イラク反戦行動に対する「政治弾圧」については、例えば「戦争に反対して何が悪い！反戦の声に対する政治弾圧=不服従の代償」(「アナキズム」第3号)など参照。
- *8 「反戦落書き」については、渋谷望×のびた×平沢剛「何度でも場所をあける！」(「図書新聞」03・6・7)参照。当事者の「裁判」での「意見陳述—03年6月16日」は、「アナキズム」第3号、また、「最終意見陳述—03年12月17日」の全文は、「アナキズム」第4号に収録されている。
- *9 「クルド難民・支援」については、渋谷望「狙い撃たれる外面：クルド人難民強制送還について——対外的な『人道支援』の裏のドメスティックな難民排除」(「図書新聞」2005年3月5日)参照。
- *10 「素人の乱」の紹介については、雨宮処凛「『貧乏』を逆手に反撃が始まった」、「ルポ 地位でもなく、おカネでもなく、とりあえず、こたつ 素人の乱×高

円寺」(「論座」07年9月号)参照。また、「雨宮処凜のオールニートニッポン」第3章参照。

- *11 「スペクタクル社会批判」については、ギー・ドウボール(木下誠訳)「スペクタクルの社会」(ちくま学芸文庫03)参照
- *12 ロビン・ケリー「ゲッターを捏造する」(彩流社07・4)また、「自立してないのはどっちだ」については、堅田香緒里+山森亮「分類の拒否」(「現代思想」06年12月号)参照。
- *13 ハート+ネグリのいう〈共〉については、その「マルチチュード」の監修者である水嶋一憲「愛が〈共〉であらんことを」(「現代思想」05年11月号)参照。
- *14 青土社・06年刊行。またその姉妹編とでもいうべきものに、「流体都市を構築せよ!—世界民衆都市ニューヨーク形成」(青土社・07年)がある。
- *15 「庭=運動」については、更に高祖「庭=運動以後」をふくむ 特集「AVANT—GARDENING」(「VOL」01号 以文社)参照
- *16 「米騒動」における検挙人数2万5千人余、「騒擾罪」による10年以上の「懲役刑」71名・「絞首刑」3名はいずれも「被差別部落」民。なお「米騒動」に遭遇した大杉栄は、「いま、彼等は彼等だ。中身だけの彼等だ。・・・彼等自身の魂を爆発させる」(「この酔い心地だけは」と表現している。なお、「米騒動」から「水平社」結成に至る流れについては、松尾 尊兌「大正デモクラシー」(岩波現代文庫)参照。
- *17 IWWについては、古いものだが、P・レンショウ(雪山慶正記)「ウオブリーズ」(批評社・73)や久田俊夫「アメリカ・サンジカリズム」の“頭脳”——ビンセント・ジョンの実像」(お茶の水書房・90年)などがある。
- *18 「アンラーニングプロジェクト」では、渋谷さんに続いて11月4日(日)小倉利丸さんを迎えて「アウトノミアからオルタグロバリゼーションへ、そしてG8をむかえ撃つ」というトークを行った。日本での「G8をむかえ撃つ」ことへ向けた取り組みについては、そのトークの要約を収録した私・たちの「ニューズレター」(07.12)を参照してほしい。

小倉 利丸 アウトノミアからオルタグローバルゼーションへ そして G8 をむかえうつ

社会意識の契機となった仙台の「ベ平連」運動

僕がこれまで何をしてきたのかということと併せて、来年7月の洞爺湖でのG8サミットのことも念頭に置いて話して欲しいということなので、今日はそのことも含めてお話したいと思います。(編者註:「アンラーニング・小倉学習会」は07年11月に行われたものなので、小倉さんの話の中の「来年」というのは、全て08年のことを指す)

まだまだ自分の人生を回顧するような年齢ではないつもりですが、このような場合は、これまでの自分の人生の「中間総括」のための一つの良い機会だと思いますので、今まで僕がやってきたことやその中で考えてきたことを、自分でも整理する意味で話してみたいと思います。期待していた話とは違うということもあるかもしれませんが、その点については、また後の質疑のところでも補足したいと思います。

来年7月に、洞爺湖G8サミットが開かれるわけですが、サミットが初めて開催されたのが1975年なので、既に30年以上も続いている先進国の会議ということになります。その30年以上に及ぶサミットの中で、これまで何が論議され、決定されてきたのかについて振り返る作業を、僕は今、やっているところです。偶然ではありますが、ちょうどサミットの30年と、自分が大学を出た後、大学院に進学して、その後大学の教員として富山に来て、いろいろなことを考えてきた歳月とがほぼ重なっています。

もうずいぶん昔のことですが、1968年を中心に、日本や世界の各国で学生や若者が、大規模な異議申立ての運動を展開していた時代がありましたが、そのころ、僕は高校生で宮城県の仙台市で暮らしていました。「ベトナムに平和を！市民連合」、略して「ベ平連」という反戦運動組織については、皆さんもよく御存じだと思いますけれども、吉川勇一や最近亡くなった小田実といった人たちが「仕かけ人」となって、共産党や社会党といった革新政党系列の大衆運動でもなく、政治組織でもないという、それまでになかったユニークで新しい市民運動のスタイルが初めて登場しました。僕がいた仙台にも「ベ平連」のグループがあって、そこは僕のような高校生でも気軽に



出入りできるような場所でした。

その頃は、ちょうどベトナム戦争が非常に深刻化してきた時でしたが、日本のベトナム戦争への負担や日本の米軍基地の問題について肌身で感じるような時代状況の中で、そういった反戦運動に関わりを持ちながら、高校生として、自分なりにいろいろと社会について考えるようになっていきました。そうした雰囲気の中で、自分の周囲の大学生がマルクスを読んだりしていると、それにつられて自分もよくわからないままに読んだふりをしているようなことがありました。マルクス主義では下部構造と上部構造という言い方をしますが、経済が土台にあって、その上に政治や法といった仕組みがあり、土台である経済が上部構造である政治を規定しているというような社会観が、通俗的なマルクス主義の「公式」としてあるわけです。当時の自分もそのような発想で、まず土台である経済をしっかり勉強するのが本筋だろうと考えて、大学に行くときに経済学部を選んだわけですが、僕が経済学を専攻した理由は、それ以外にはあまりありません。

■「先進国」優位の支配体制はどのように再確立されたのか

僕が大学生や大学院生として経済学を学んでいた頃の日本の政治・社会運動では、共産党系を中心とするグループが伝統的にあり、今はもうありませんが、社会党の左派系のグループがあり、またその他に新左翼のグループがあるという状況でした。そういったグループのそれぞれが、社会理論や政治・経済的な理論をめぐる対立したり、社会観や理論用語の使い方の違いについて論争したりするということが、たびたびありました。とりわけ、60年代から70年代にかけての時期の政治・経済的な大きな議論のテーマであったのが、日本の帝国主義としての性格をどのように把握するかということでしたが、それは特に新左翼のグループから共産党の戦後日本資本主義の見方に対する批判として、強く打ち出されていました。

ちょうどその頃から、日本企業が積極的にアジアの国々へ「進出」して、資本を投資したり、日本製の商品の輸出をしたりすることによって、戦前のような軍事力による植民地支配ではないけれども、もう一度日本がアジアの市場を自分の「庭」として囲い込むことを始めていました。これはアジア各国から見れば、日本による第二の「侵略」であるというような議論が出てきたのも、だいたい70年代ぐらいのことだったと思います。

当時、日本の国際関係の中での位置をもっぱら日本とアメリカの関係だけで見て、アメリカへの従属やアメリカによる支配といった、いわば「被害者」的なスタンスから日本の戦後を捉えるという見方がとりわけ、共産党などの旧来の左翼では主流でした。それに対して、60年代から日本が他の先進国に近づく勢いで経済成長を遂げて、アジアに対する経済的な侵略を始めているという視点から、日本の帝国主義的なあり

方を捉えることができるのではないかという問題意識から、自分が日本の政治・経済的な状況を見るようになったのは、やはり70年代の頃だったと思います。

G8サミットのことについては今日の話の最後でまたふれたいと思いますが、少し先回りして言うと、60年代後半というのは世界的に見ても一つの変り目の時期だったと思います。近代資本主義国家が16世紀ごろに誕生して以降、スペインやポルトガルからオランダ、フランスそしてイギリスというように先進国の中心になる国は時代ごとに移り変わるのですが、いずれにせよ先進国と見なされていた国は、アジアやアフリカ、南北アメリカ大陸に植民地を持ち、そこを支配することを通じて、世界の市場を支配していくという仕組みがあったわけです。それが第二次世界大戦後、かつての植民地が次々に独立していく中で、どの先進国も、植民地を通じた世界の支配や世界の市場の独占によって自分の国の豊かさを維持していくことが、もはやできなくなっていくます。

また、20世紀の前半から、ソ連を中心とした社会主義圏というもう一つの政治・経済体制が登場して来たのですが、20世紀後半は、ちょうど冷戦の時代でもありました。そういった社会主義圏と、それから新たに独立した第三世界の国々にはさまれて、先進諸国と呼ばれるような国々を中心とした資本主義圏は、非常な苦境に立たされていました。60年代後半というのは、そのような時代状況の中で、日本がアジアに対して新たに経済的な侵略を進めていった時期でしたが、一方、それは第三世界の国々の側からすれば、かつての植民地主義の時代から継続してきた先進国に主導の世界の政治・経済の支配体制を、何とかくつがえそうとしてきた時代でもありました。それは同時に、国連がそうした国際関係の転換の中で、大きく第三世界の側にシフトしようとした時代でもあったのです。

つまり、国連総会というのは、それぞれの国家の規模や経済力に関係なく、あくまでも第三世界の国々も含めて「1国1票」の制度ですから、アジアやアフリカの植民地が独立して国家の数が増えることで、国連総会で先進国が多数を占めることができなくなり、先進国は自分の利害を通しにくいような状況になります。そこで第三世界の国々は、60年代ぐらいから、先進国主導の帝国主義的な枠組みとは異なる新しい国際関係のシステムを、国連を通じて創り出していこうと考えて、UNCTAD（国連貿易開発機構）というものができるわけです。そのUNCTADを通じて、第三世界の側は、従来の先進国に有利な国際貿易や国際経済の不平等なあり方を変えていくことをめざしました。

それに対抗して、日本のような新参者の先進国と旧来の欧米の先進国が一緒になって、国連の経済的な保護・規制機能を無力化して、先進国に有利な国際経済の仕組みを作ろうとする動きが、その時期にありました。それでは、先進国側は具体的に何をしようとしたのかというと、IMF（国際通貨基金）や世界銀行、それにGATT（関税および貿易に関する一般協定）という3つの国際金融機関を作って、世界の経済システ

ムを先進国に有利なように持って行こうしたのです。そのように、国連の経済的な保護・規制機能を事実上無効にする作戦をとったのが、60年代から70年代にかけての国際政治の舞台での先進国側の動きの一つだったと思います。

それでは、なぜIMFや世界銀行が、先進国にとって都合がいいものなのかということですが、それらの国際金融機関が実際に何をしているのかはとりあえず横に置いて言いますと、それらの機関の運営上の基本的な原則は、各国の出資額に応じて投票数を割り当てるということになっているからです。つまり一国一票が原則である国連総会の投票方式が民主主義的なやり方だとすると、IMFや世界銀行は一国一票ではなくて、それぞれの国がこれらの機関に出資した出資額に応じて投票の票を割り振るといふ非民主主義的な意思決定の方式を採用しています。そうすると当然、経済力があって多額の出資をしている先進国が、その分だけたくさんの票をもらえるわけです。IMFや世界銀行は、現在もそうした仕組みを採用していますが、アメリカは確か16%ぐらいの票を持っていて、日本は約6%の票ですが、その他のいわゆるG8と呼ばれる国々の票も全部合わせると、全体の約25%の票を持っています。それ以外の大多数の国はせいぜい1%未満といった程度の票しか持っていないわけです。そのように、IMFや世界銀行では先進国が全体の多くの割合の票を持っているのですが、それに加えて、先進国が後押ししているような特定の第3世界の国々や、先進国の次に経済成長しているような中進国の持つ票を上手くまとめて、IMFや世銀を先進国の側が巧妙にコントロールすることで、世界経済を支配していくということが、この頃から始まっています。

今、少しややこしい話をしたのは、国連のもつ、第三世界の国々にとっての経済的な保護機能を無力化して、先進国有利の経済システムをつくりだすことに向けた先進国間の利害調整をどう進めるのかということが、75年にサミットと呼ばれている先進国の首脳会議が最初に開かれた際の、一つの重大な議題であったからです。このように、世界経済システムの上で先進国だけに都合の良いシステムが確立されていくのとはほぼ同じ時期に、日本がアジアへの帝国主義的な経済侵略を行うようになり、そのことが自分の周囲でも大きな論議になっていく時代に、僕は経済学の勉強をし始めたわけです。

■ポランニーの思想との「出会い」を通じて経済学の枠組みを問いなおす

ただ、経済学の勉強はあくまでも勉強であって、IMFや世界銀行について研究する経済学者がいないわけではないのですが、それはあくまでも経済のシステムとして見るということであって、先進国による国際的な支配体制が国際的な経済システムを通じてどのように形成されているのかといった「政治」の問題にはなりません。結局、学問の世界ではそれぞれ「縄張り」があって、経済の問題は経済学で取り上げ、政治

学ではそれぞれ国際政治専門の学者と国内政治専門の学者がいるというように専門化されてしまっていて、それぞれの専門領域の中で理論をつくり出して議論していくというようになっています。しかし、自分としては、やはり、現実の世界は、決して、ここまでが政治の問題でここからは経済の問題だといったような「縄張り」で動いているわけではないし、そういった縄張り意識に囚われてしまうことで、目の前の現実が見えなくなってしまうのではないかということ、70年代の後半の、大学院生の頃から大学に就職する時期にかけて考えるようになっていきました。

僕はマルクス経済学を当時学んでいましたが、その中でも「経済学」という枠組みの限界や疑問も感じていました。この限界への挑戦のきっかけとなったのが、カール・ポランニーという、第一次大戦から第二次大戦にかけて活躍した、「大転換」という本を書いた思想家との出会いでした。彼は、「経済人類学」の創始者とも言われているのですが、発想としてマルクス主義とも共通する部分もありますが、マルクス主義そのものにはあまり囚われない視点で、近代的市場経済の批判のための問題提起を行っています。「大転換」という本は、私が大学院生の頃に日本語に翻訳されたのですが、その中で彼は、市場経済は、「労働」と「貨幣」、「土地」の3つを商品化することで社会を解体するという恐るべき破壊力をもつものなので、それらの商品化をどこかで押しとどめないと社会は崩壊してしまうという警告を行っています。（*1）

ポランニーは、先進資本主義社会だけではなく、経済学と人類学の両方の理論を結びつけて、アフリカの伝統社会がどのように営まれているかも含めて市場社会を分析しているのですが、一般的に経済学者があまり取り上げない、例えば、賃金を得るための労働というのではない、家族や宗教といった領域が社会にとっていかに重要であるかを強調しています。伝統的な社会を見ていけば、家族は生産の役割も担うし、宗教的な儀礼を通じて共同体のメンバーの間で共有される世界観がつけられたりもするわけで、そういった賃労働以外の領域が社会にとって重要だというのは、ある意味では当然のことですが、近代的な社会では、そのことが見えなくなってしまう。家族というのは私的なことだし、宗教というのは経済とは何も関係がないという話になるのですが、ポランニーの理論に触れることで、家族や消費のあり方といった「再生産」と言われる領域の重要性に気がつくようになっていきました。（*2）

■労働を拒否する「労働」運動としての「アウトノミア」運動

先ほど言ったベトナム反戦運動以外にも、60年代から70年代にかけて、例えばアメリカでの公民権運動や女性解放運動といった様々な新しいタイプの社会運動が登場してきました。従来の左翼やマルクス主義での基本的な社会観では、労働者と資本家という二つの階級間の対立や階級闘争を主軸として新しい社会へ向かっていくのであり、したがって社会変革の主要な担い手となるのは労働者階級であるということにな

ります。しかし、当時は、階級間の対立や階級闘争という発想の枠に収まらないような、例えば民族問題や差別の問題、また、ジェンダーの問題をどう考えるのかということが次々に提起されるという状況がありました。そうした階級以外の様々な問題を、どのように社会全体に関わる問題として取り上げていけるのかということを考えさせられた時代でした。

環境の問題もそうですが、そのような問題が、日本でマルクス主義理論と呼ばれているものの中ではきちんと取り上げられることのないままになっているという印象が自分にはありました。そうではなく、やはりそこから抜け出す道をさがさなければいけないと考えるようになったことが、今に至るまで、自分が通常の経済学分野での問題意識とは違うところで物事を考えようとするようになる出発点になったように思います。そのように、自分があれこれ考えるようになったことを、具体的に考えるための手掛かりを与えてくれたのが、60年代末から、徹底的な政治弾圧を受けて運動が壊滅する70年代末までの10年近くもの間、若い労働者や学生、失業者たちを中心に活発に展開されたイタリアの「アウトノミア」運動でした。（*3）

「アウトノミア」（Autonomia）というのは、英語で言えば、「オートノミー」（autonomy）で、「自治」や「自律」といった意味なのですが、そうやってしまうとこの運動のもつ意義や独自性が正しく伝わらないことになります。一言で言えば、「アウトノミア」とは、既存の支配関係や権力関係から自らを「切断」して、新しいライフスタイルや社会関係をつくりだそうとする運動でした。それは、特定の個人やグループによって始められた運動というよりは、60年代末のイタリアの運動の中から自然発生的に生まれたもので、特に都市部の労働者や若者がその中心的な担い手でした。

「アウトノミア」の中心的な理論家・活動家の一人であるアントニオ・ネグリの名前は、最近、日本でもよく知られるようになっていますが、彼は「労働の拒否」ということを掲げていました。それはどのようなことなのかと言うと、労働の「尊厳」ということを根拠にして、労働者保護を訴えたり、労働条件の改善を求めるような労働運動のあり方自体を拒否するということであり、いわば、労働を拒否する「労働」運動といったものを唱えていたのです。日本とは違ってイタリアの憲法では、イタリア社会は労働者の労働によってつくられるものであるということが明記されていて、労働の問題が政治的な重要性を持つというイタリア特有の社会的な背景があります。（*4）

ネグリの主張は一見極端なもののように思えますが、労働者がストライキを行うことの根拠は何であるのかということや、現代資本主義社会の中での労働には本当に意味があるのかといった根元的な問いかけがそこに込められていると、自分としては受けとめていました。（*5）

この70年代というのは失業が大きな社会問題になった時代で、その失業の中で基本的に二つの方向が失業に対する運動として出てきています。一つには、「職をよこせ」、

つまり、失業からの解放としての雇用の安定を要求するわけですが、他方では、働いていようが働いていまいが、人間としての生存に必要な基本的な所得は保障すべきだという主張が出されたのです。アウトノミアの運動では、基本的に後者のような考え方を取っていて、「社会的賃金」という言い方をしていますが、人々が生存するために必要な基本的な所得は、働いているとか働いていないとかに関係なく、社会が保障すべきだという考え方が主張されていました。最近、日本でも「ベーシックインカム」ということが結構話題になっていますが、そういう考え方の基本になる議論が、この時代に出てきています。

そういう議論が出て来る背景には、一つは失業の問題がありますが、もう一つには女性たちの運動の中での問題提起も影響を与えています。日本と同様に、イタリアも比較的専門主婦の女性層が多く、家父長的で、女性に対する差別や男性中心主義的な考え方が強い社会だったのですが、イタリアの女性たちが、「家事労働に賃金を！」というスローガンを掲げたわけです。これは文字通り、「家庭内での家事労働に対して、賃金を払え」と要求しているという側面もあります。しかし、他方では、そうした問題提起によって、この社会の中には賃金が支払われない労働や見えない労働というものが存在していて、そういった無賃金の見えない労働によって社会が支えられていたり、資本主義社会的な搾取の仕組みが維持されているということを見つけると同時に、社会のあり方を転換することをめざすという、戦略的な意図をもって行われた主張だと思います。（*6）

また、「家事労働に賃金を！」という主張と併せて、「学生にも賃金を払うべきだ」という議論が出てきます。これもある意味では当然の話で、学生にとっては勉強するということが義務や「仕事」であり、資本主義社会のシステムでは、働かなければ生活のための賃金が得られないわけですから、働かずに勉強している若者はどうやって食べていけばいいのか、という原則的な問いがあるはずで、そうすると、これはまっとうな議論だと僕は思いますが、学生であっても所得を保障されるべきだという考え方が、当然出てきます。

そこまで考えると、そもそも企業に雇われて働かないと賃金を得られないという仕組み自体がどうもおかしいのではないかと。賃金というのは一つの象徴的な言い方ですが、そもそも生存に必要な所得や、社会制度へのアクセスの権利というのは、会社で働いているか、それとも失業者であるかといったことや、子供・高齢者・障害者であるかに関わりなく、原則として保障される社会でなければおかしいという議論が出てきます。その議論をさらに突き詰めていくと、「それでは、働かないで遊んでいてもいいのか」という議論が当然出てくるわけですが、後の時代になると、そういう論議は、経済学者の間でも真面目に取り上げられるようになります。実際、遊んでいても生存の権利はあるわけですから、その権利は保障しなければならないと僕は思います。その時に、逆に企業で働くことの意味が問われることになってくると思い

ますし、イタリアのアウトノミア運動に出会うことで、僕は働くということの意味を
ずいぶん考えさせられました。

非常に乱暴な結論になりますが、資本主義のシステムの中で働くことの意味という
のは、ほとんど見いだせないのではないのかと、僕は考えています。しかし、働くこ
とに意味は無いと言ってしまっただけでは身も蓋もない話ですので、この社会の中ではいろ
んな形で働くことの意味を注入されたり、働くことを意味づけるための仕組みが作ら
れたりするわけです。しかし、人が働くことで得られるものが何かあるとして、それ
と働かないことで得られるかもしれないものとのを比べてみた時に、働くことによって
得られるかもしれないものの方が重視されるようにこの社会の仕組みができてい
ること自体に、やはり、大きな問題があるのではないかと。そのように考えるよう
になったのは、ちょうどこの頃だったように思います。

アウトノミアの運動では、その他にも、例えば、現代資本主義社会の捉え方として、
企業の外に都市や人々の私的な生活があるというよりも、生産現場の外での余暇や再
生産といった領域も含めて、社会全体がいわば一つの工場であるかのような形で資本
によって管理される方向へと進んでいるのではないかとといった分析が行われていま
す。また、労働者階級などと言うと、19世紀から20世紀にかけての生産工場での労
働者を中心とした非常に古典的な労働者のイメージを思い浮かべてしまいがちですが、イ
タリアでのアウトノミア運動が展開されていたのは、そういった古典的な工場労働者
ではない、特にサービス業や不安定雇用の労働者が急速に増えていった時代でもあり
ました。そのような新しく登場してきた労働者たちをどう名付けるかということで、
ネグリは「社会化されたプロレタリアート」や、「社会的プロレタリアート」という
言い方をしています。その後、ネグリは「マルチチュード」という新しい概念を提示
したりしていますが、それにつながるような問題提起が行われていたのも、ちょうど
この時期だったと思います。

しかし、イタリアのアウトノミア運動は、1979年に、イタリア政府による過酷な
大弾圧によって、暴力的に潰されました。ネグリも、78年の「赤い旅団」による、キ
リスト民主党党首でイタリアの元首相のアルド・モロ誘拐・殺害事件の首謀者の一人
という、でっちあげの罪名で逮捕されました。その後、83年に、ネグリは獄中から国
會議員に立候補して当選することで、一旦は監獄から出所するのですが、そのわずか
数ヶ月後、再収監の危機を脱してフランスに亡命しました。（*7）

そのように、アウトノミア運動の何千人という規模の活動家たちが逮捕されたり、
国外に亡命するということが70年代末から80年代にかけて起きているのですが、そ
のことが逆に、アウトノミアの運動をイタリアの外にもいろんな形で広めていくき
っかけになりました。フランスやドイツ、アメリカ、カナダといった国でも、アウト
ノミア運動の活動家たちと同じような考え方をする人たちが次々と登場してきたのは、
アウトノミア運動に対する弾圧の後の時代です。僕自身は、ネグリが獄中に囚われて

いた頃に、日本でのネグリ救援運動のちょっとしたお手伝いのようなことをやったりしていたわけですが、自分にとってアウトノミアの運動のもつ意義は、今でもとても大きなものとしてあります。

■商品の「使用価値」それ自体を問いなおす

イタリアのアウトノミア運動との出会いの後、僕が何を考えてきたのかということを経験の流れにそっとうち少しお話したいと思いますが、日本は80年代末から「バブル」の時代に入り、社会全体が消費に浮かれるような時代になるわけです。そのような時代状況の中で、僕は、そもそも消費というのは何なのかということはずいぶんと考えさせられる場面に直面したのですが、「全てのものを商品化するというのが資本主義社会の悪しき側面であり、それは認めがたいことである」という、非常に単純な議論がその当時、結構ありました。

マルクス経済学では、商品には交換価値と使用価値という二つの側面があって、本来の意味での物の特性というのは使用価値の方にあるということになっています。例えば、ここに時計がありますが、時計は時刻を表示するという機能をもっていて、それが時計の使用価値ということになります。それに値段を付けて商品として流通させたり、価格でその価値を示すことによって、時計であれば時刻を表示するという本来の使用価値や機能がお金に支配されてしまうことになります。ですから、商品の本来の使用価値を取り戻すためにも、交換価値というものを否定しなければならないという議論によくなるわけです。

しかし、僕は価値（交換価値）を批判して「使用価値の回復」を主張するような使用価値観には疑問がありました。つまり、そもそも商品の使用価値というものに、本当には意味があるのだろうかと思えるようになったのが、大体この頃のことです。この問題は、ある意味では、エコロジーや環境といった問題にもつながってくるのですが、「お金で取引されたり、商品として流通するというのではなく、物としての本来の使用価値や有用性があればいい」といった議論は、意味がないのではないかと。やはり、商品として作られていて、社会の中で使用価値をもっているということ自体に、人々のライフスタイルや生活習慣を形成するという作用があるわけです。とりわけ日本のような先進国では、商品の使用価値には、人々が生活する上での基本的な価値観を作り出すという非常にイデオロギー的な性質が含まれていて、使用価値というものの自体をどこかで疑うということがなければまずいんじゃないかということ、考えたりしていました。

これはライフスタイルをどう考えるかという問題につながっていて、ちょっと厄介なことなのですが、例えば、どこの先進国でも、「車社会」といったあり方が社会にとっての基本になっています。そのような車社会といった社会のあり方に対して、疑

問や異義を表明するとすれば、自動車が商品であるということ以前に、やはり自動車も持っている文化的・社会的な価値自体をもう一度問い直さなければいけないのではないか。このことは、自分たちの現在の生活のあり方をどのように違うものへと変えようとするのかという、エコロジストの人たちの議論にもつながる部分があると思います。そのようなことも当時、考えていましたが、それは今でも大きな問題だと思いますし、特に反グローバリズム運動にとって、大きな課題だと考えています。

■自律的な市民メディアをつくりだすことをめざす

90年代の前半ぐらいから、皆さんもご存知のようにコンピュータが普及し始めて、同時に、インターネットなども普及していく時代に入っていました。その頃、僕も物珍しさもあってパソコン通信のようなことをやったりしていた時代がありました。当時はインターネットではなく、まだ、パソコン通信とっていた時代でしたが、そのネットワークを通じて、メキシコのサパティスタ民族解放軍の闘争についていろいろと情報を得ることができました。

その頃のパソコン通信は、まだ、今のインターネットのように、全ての人が自由に使えるといったものではなく、アメリカであれば、ほぼ大学の研究者が利用者の中心でしたし、現在、インターネットのプロバイダーであるニフティーやビッグロブなどはもともとパソコン通信の会社だったわけですが、日本では、まだニフティーがパソコン通信会社であった時に、国内の回線だけではなく、海外ともネットワークでつながる仕組みをサービスとして提供していました。また、大学間のコンピュータのネットワークで海外とのコミュニケーションが何とかできる仕組みがあって、非常に使い勝手の悪いものでしたが、国際電話や国際郵便のやりとりをするよりは確かに格段にスピードが速く、今の電子メールと同じようにコミュニケーションをすることができました。

そうした現在のインターネットの前身にあたるようなパソコン通信のネットワークを利用することで、世界各地のいろんな運動についての情報がやりとりされるという状況が、90年代前半にできてきました。そのような世界の運動情報のネットワークがあるという話を聞いていた頃のことですが、94年1月に、サパティスタ民族解放軍が、アメリカとメキシコの間での北米自由貿易協定の発効に併せて、メキシコのチアパス州で武装蜂起を行いました。また、彼らはメキシコシティーへの大行進も行いました。その際に、メキシコのサパティスタの闘争を支える国際的な連帯運動のための重要なコミュニケーションの手段となったのが、パソコン通信やインターネットなのです。

(*8)

私の知人に栗原幸夫という人がいるのですが、その人はアジア・アフリカ・ラテンアメリカ作家会議を開催したり、文芸批評もしたりしていた人です。また、彼は、かつ

てのベ平連運動の仕掛け人の一人で、日本の米軍基地からの米兵の脱走兵を、日本国外に脱出させるという運動にも取り組んでいました。彼はもう70歳後半くらいですが、非常に新しいものが好きな人で、インターネットの可能性にいち早く注目していました。そして、「ほっておけば企業や政府が使う道具になってしまうが、その前に、インターネットを市民運動で使えるようにしたほうがいいのではないか。世界的な状況を見ても、サパティスタの運動も含めて、インターネットを活用して情報をやり取りするということがいろいろと出てきているので、使い方をいろいろ考えよう」ということを、僕に相談したのです。そこで、インターネットが商業的に利用可能になってきて、多くの人がインターネットを通じてメールのやり取りができるようになってすぐの時期から、オルタナティブな運動の情報のやり取りができるようなメーリングリストを作りました。それは、エイメールという名前で、今でも存続しています。

1995年にペルーの日本大使公邸が占拠されるという事件が起きましたが、その際に、僕は、日本大使公邸を占拠したMRTA（トウパック・アマル運動）側の主張やアムネスティの動き、また、当時のペルーのフジモリ大統領の政府による人権侵害などについての情報をインターネットで流していましたが、日本大使公邸占拠事件に対して日本中で非難が渦巻いていました。僕は別に、MRTAを支持していたわけではありませんが、東京経済大学の教員の山崎カヲルと一緒に、政府やマスメディアが流すようなものとは違う情報を提供することで、大使公邸の占拠にはそれなりの理由があり、単なるテロリストの暴力というだけではすまない側面があるのだということを、示そうとしました。そのことに対しては、当時、夕刊フジや産経新聞など、いくつかの新聞で非難めいたことを言われたりもしていました。

インターネットがある種の対抗的な道具として機能しているということ、僕自身が実感できたのが、この頃までの時期でした。日本ではその後、政府やマスメディアの側のインターネットを使った情報発信力が強くなり、市民運動が情報を発信して、メディアに対する影響力を発揮することができていると実感できることが、年を追うごとに少なくなってきました。

■インターネット・ガバナンス運動に関わる

90年代の後半から2001年の「9・11同時多発テロ事件」が起きる時期にかけて、僕が関心を持って取り組んできたことの一つに、インターネットのガバナンスという問題があります。インターネットは世界中どこでも、メールのアドレスを持っている人とであれば、自由にメールのやり取りができます。今、世界中に10億人以上のインターネットユーザがいると言われていますが（複数のアドレスを持っている人も多いので実数はもっと少ないと思いますが）、同じメールアドレスが重複するということは絶対に起きないようになっています。

それでは、インターネットの通信が混乱することなしに、例えば、日本にいるAさんから南アフリカにいるBさんへと通信ができるように、誰がそれを管理しているのか、という問題が実はあるのです。このことは、今でもあまり知られていないことだと思いますが、例えば、通貨ならIMF、貿易であればWTOという国際機関がありますが、インターネットの場合、そのようなよく知られている国際的な組織があるわけではありません。それでは、インターネットを管理するような組織が何もないのかというと、ほとんど知られていませんが、実は、ICANN (Internet Corporation for Account, Names and Numbersの略語) と書いて、アイキャンと呼ぶ組織があって、インターネットの基本的なインフラに関わる部分を管理しています。

これは政府の組織ではなく、アメリカ政府に登録されている、民間の非営利組織という位置づけになっています。そのICANNという組織が全世界のインターネットのトップにあり、そこが全部で13あるルートサーバーと呼ばれているサーバーを管理していて、世界中のインターネットの通信が混乱しないように運営しています。それと関連して、各国ごとにそれぞれのインターネットのネットワークを管理する管理団体があって、日本にもそのような団体があります。

皆さんのメールアドレスの最後に、ドットcomとか、ドットnetといった文字がついているはずですが、こういったドットの後ろの文字や記号を勝手に自分でつけることはできません。この一番最後の部分を、トップレベル・ドメインというのですが、これはICANNと各国の管理団体が全部管理していて、これをどうするかは、そこでしか決めることができないのです。トップレベル・ドメインとして、ドットcomや、ドットorgといった文字がついているのですが、orgというのはオーガナイゼーションの略で、非営利団体ならorgで、民間企業ならcomをつけるといったルールがあります。

今言ったようなことは、言い換えれば、全世界のインターネットをたった一つの組織だけで仕切っているということなのですが、そういった独占的な状況を放っておくのはまずいのではないかという論議が、インターネットに関わる活動家の中でありました。その頃、僕は日本のJCAネットという、インターネットの市民プロバイダーのようなことをしている団体の活動に関わっていましたが、そのような意味で、インターネットのガバナンスの問題への理解を深めなければならぬだろうということで、海外に出て行く機会が増えました。ICANNという組織では、世界の五つの大陸を一年間で一つずつ渡り歩いて理事会の国際会議を行っていますが、NGOと呼ばれるような団体がその会議を追っかけて、そこで文句を言ったり、注文をしたりするわけです。そのように、NGOとして、ICANNの国際会議の追っかけをやるということ、インターネット・ガバナンスの問題に関わっている、いくつかの団体が行っていました。そういった国際会議では、表現の自由の問題や、アクセスの問題などいろんな問題が議論されたのですが、僕もそういった活動に関わっていました。

自由にものが言える2チャンネルというものもあったりして、世間では、インター

ネットは匿名性が高いと思われていますが、実はインターネットの匿名性というのは、そんなに高くはないのです。一番匿名性が高い遠距離の通信手段というのは、実は手紙なのです。手紙なら、受取人の住所氏名は書かなければなりません。差出人の住所氏名は書かなくても、相手に届くわけです。封筒で手紙を出せば、それを開封しない限り、中は見られません。途中で中をのぞかれるということは、電話やインターネットに比べれば非常に少ないし、難しいのです。逆にインターネットや電話は、機械的に盗聴することが非常に簡単です。そのことも含めて、コミュニケーションのプライバシーや、国家による干渉などといったことに対して、非常に大きな注目が集まってきたのはこの頃からです。（*9）

アメリカのクリントン政権時代のゴア副大統領は、学校にインターネットをどんどん入れる政策を進めたのですが、それと同時に、子供たちがインターネットにアクセスしても大丈夫なように、インターネットの内容を上品なものにしようという議論も当然出てきます。そして、ネットに対する規制を厳しくしようとする際に、アメリカでよく議論になるのは、ゲイやレスビアン、トランスジェンダーといわれる人たちの権利が侵害されてしまうという問題です。僕自身も、インターネット上の表現の自由について、ずいぶん考えさせられました。盗聴法が日本の国会で始めて審議されることになったのは、90年代後半の時期ですが、僕はその頃にこういったインターネットやコミュニケーションの問題に深く関わるようになりました。

しかし、2001年9月11日に「同時多発テロ事件」があり、それ以降インターネットをめぐる環境がすっかり変わってしまって、アイキャンという組織に対するアクセスが非常に難しくなりました。僕は何回か海外に行きましたが、そうそう年に何回も自分のお金で海外に行けるわけではなく、NGOが海外に行くときに費用をサポートするような財団があって、そこからお金をもらって何とかやりくりしていたのです。ところが、そのようなNGOや市民運動グループにお金を援助していた大きな財団が、「同時多発テロ事件」の後、すべてテロ対策にだけお金を出すようになり、表現の自由や市民の権利の保障といったことへの資金援助をしなくなったので、多くの人たちがそういった海外での会議に参加できなくなりました。

インターネットガバナンスも、それまでは、オープンにインターネットを使って、ユーザーの人と意思決定していこうという論議があったのですが、そういった論議がなくなって、むしろテロセキュリティー一本やりになってしまいました。そういう状況の中で、それまでのようにインターネットガバナンスの問題に関わることが、事実上できなくなるような状況に追い込まれてしまいました。

■反グローバリズム運動との接点をつくり出す

その一方で、90年代後半は、大きな反グローバリズムの運動が、先進国でも次々と

出てくる時代でした。その中でもとりわけ象徴的だったのは、99年に、アメリカのシアトルで、WTOの閣僚会議が10万人のデモに囲まれて、流会に追い込まれてしまったことです。（*10）そういった反グローバリズムの運動が、アメリカやヨーロッパの国々で、次々と起こってきていたのですが、なぜ日本ではこういう運動が起こらないのかということが、自分としてはとても気になっていました。

これらの反グローバリズムの運動が中心なスローガンとして掲げていることは、WTO絡みの国際貿易の問題や、IMFによる国際金融や第三世界の国々への債務の問題、世界銀行に関連する開発援助の問題など、世界的な経済の問題がその多くを占めています。しかし、そういった広い意味での現在の国際社会のあり方の問題に対して、日本の社会運動の中からは明確な反応が返ってきません。他の先進国では、第三世界の債務や貧困の問題に対して、多くの人たちが大きな関心を寄せていて、債務帳消しの運動や自由貿易に対する反対運動が大きな大衆運動になっています。この違いは何なのだろうか、というのがその当時の僕の大きな疑問としてありました。

当時、僕は、「ピープルズプラン研究所」という団体の一会員でした。そこには、武藤一羊、松井やよりなど第三世界問題に取り組んできた人たちがいて、こういうことを勉強したいといえば何か協力してくれるのではないかという思いから、反グローバリズムの運動が日本ではなぜこのように全く盛り上がらないのか知りたいという話を持ち込んだところ、知りたいのならお前が自分でやれ、ということになってしまい、今では、僕が「ピープルズプラン研究所」の共同代表までやるようなことになってしまいました。ただ、日本は世界的な反グローバリズム運動の波にのりきれないということだけ言っても何もならないし、それでは実際に反グローバリズム運動というものがどういう運動になっているのかを知りたいという思いから、第1回めの集まりには行けなかったのですが、「世界社会フォーラム」にも参加するようになりました。

「シアトルの乱」の後の総括の会議の中で、そういった街頭での抗議行動も大事だがそれだけで今の新自由主義的なグローバリズムを本当に追い込めるのか、もっと運動間で討議するような場が必要ではないかという論議がありました。そのような問題提起を受けて、毎年、スイスの保養地のダボスで世界のトップ経営者や政治家が集まって開催される「世界経済フォーラム」に対抗する形で、2001年にブラジルのポルト・アレグレ市で、最初の「世界社会フォーラム」が開かれることになりました。その「仕掛け人」となったのは、ブラジルの農民運動・労働運動の活動家や、貧困問題の解決に向けて投機的な国際金融取引への規制を求めるフランスのATTACといった運動体などですが、それらの運動組織の人たちには、多様な運動を担う活動家たちが一同に会して活発な論議を行うことを通じて、「今のようなもう一つの社会」のあり方がどのようなものであり、それに向けてどのような取り組みが必要であるかといった、共有化された「見取り図」がそこから生み出されるのではないかといった期待があったと思います。「世界社会フォーラム」は、最初は一万人規模の集まりでした

が、その後回を重ねるにつれて10万人規模の大きな集まりになっていきました。（*11）

そもそも日本からは余り参加者がいないような現状で、批判めいたことを言うのははばかれるのですが、「世界社会フォーラム」の中からは、最初期待されていたような共通の「見取り図」のようなものはなかなか出てこない一方で、ともすれば高い飛行機代を払って参加できるような「先進国」の学者や知識人が年に一回集まって、親睦を深めるだけのものになってしまうようなところがあります。他方で、共同の「綱領」といったものをつくることでそれをもう少し統一のとれた運動にしていこうという動きもあるのですが、そのような動きに反対するグループもあり、「世界社会フォーラム」にとって今は一つの転換期ではないかと思います。

しかし、そうではあれ、「世界社会フォーラム」に実際に自分で足を運んで参加することで、世界中の運動のあり方の多様性や豊かさを実感することができましたし、何よりもそうした大きな集まりに大勢の若い人たちが参加しているというのが、「世界社会フォーラム」に幅や広がりや魅力を与えているように思います。同時に、「世界社会フォーラム」のようなものを、日本の中でどのようにつくることができるのかということも、僕はずいぶん考えましたし、いろんな人とも議論もしました。中には、「世界社会フォーラム」の各国版、つまり、日本であれば日本社会フォーラムとでもいったものをつくったらいいのではないかと言う人もいるのですが、僕自身はそういったものをトップダウン式につくってみても運動的な意味はどこまであるのかといった気持ちもあります。

「世界社会フォーラム」が転換期を迎えているというだけではなく、現在、反グローバリズムの運動全体が、大きなバックラッシュにあっているという印象が、僕にはあります。イラク反戦運動も同じような状況で、イラクでの戦争でアメリカが大きな困難を抱えているわけですが、しかし、反戦運動が大きいうねりとなって、アメリカをイラクから撤退させるほどの力にもなっていませんし、また、日本の「テロ特措法」にしても、残念ながら、市民運動や反戦運動の力で延長が阻止されたわけではありません。そのように、大衆的な運動が閉塞している状況の中で、実は、グローバリズムを推進している側も、次の一手が見いだせないという現状があります。そういった支配者側と運動側とが同時に「地盤沈下」をしているような状況の中で、なんとか反グローバリズムの運動が持ちこたえているというのが現状だと思います。

日本ではいずれにせよ、反グローバリズムのうねりの高揚があったわけではなく、落ちるときにもそんなに落差がないので、落差で苦しむということはありません。いえ、もちろんこのままでいいわけではありません。そのような意味で、この「世界社会フォーラム」を一つのモデルとして、日本でも多様な運動体が集まって「今のようではないもう一つの社会」のあり方をめぐって討議する場をどのようにつくるのかということは、私たちにとっての大きな課題としてあると思います。

来年の「世界社会フォーラム」は、特定の国を開催地にするのではなく、多少のずれはありますが、1月26日を「共同行動デー」として世界の各地で分散開催されることとなります。東京でも、「ATTAC Japan首都圏」などが中心になって、1月26日に、大きなシンポジウムを開くことが予定されています。それもできれば都心の会議場などではなく、江東区や墨田区の山谷あたりの場所で開催できないかということで、会場を探しているところです。

■G8を迎え撃つ体制は、どのようにつくられようとしているのか

最後に、来年7月の洞爺湖サミットを迎え撃つ体制作りは、どのようになっているのかということですが、現地の北海道では、「札幌自由学校・遊」などを中心に、道内の市民運動グループやNGOが集まって、「G8サミット市民フォーラム北海道」がつくられました。ただ、北海道の洞爺湖周辺は警備や規制が非常に厳しくなっていて、来年のゴールデンウィークの後には、一般客を宿泊させないようにするという情報もありますので、北海道現地でのデモや抗議行動がやりにくくなっていくでしょう。

また、北海道では実際にどこまでそういったことをするのか分かりませんが、今年G8サミットが開かれたドイツでは、会場のあるハイリゲンダムを中心に半径18キロメートルにわたって、侵入を防ぐためのフェンスがはりめぐされました。（*11）洞爺湖サミットの開催にあわせて、洞爺湖温泉街にはプレスセンターの建物がつくられたり、そこに札幌から光ファイバーケーブルを持ってくることとなりますが、G8サミットの後で全て撤去されることになる施設や設備を巨額の費用をかけてつくることに對して、今、現地で批判の声が挙がっています。

私自身はG8サミットそのものに反対する立場で、少なくとも日本はG8サミットから脱退すべきだと思っていますが、日本のNGOの中には、G8サミットに参加する国の首脳と交渉や政策提言をしたいと考える人たちもかなりいます。今までのサミットでも、そのようなNGOがサミット参加国の首脳に、政策提言をしたり、交渉をしたいという要求を行ったりしているのですが、そのようなNGOとの交渉をする場を設けたり、交渉したというポーズをとるためのセレモニーめいたことを、日本政府も何らかの形で行う可能性があります。そのようにサミットに対して、NGOとして政策提言をしたり、交渉をしたいと考える人たちが、「2008年G8サミットNGOフォーラム」というNGOのネットワークをつくっています。市民団体としては、この「G8サミットNGOフォーラム」が数の上では一番大きい組織ではないかと思います。

G8に反対するというスタンスをより明確に示しているのが、「G8を問う連絡会」で、これは、「ピープルズ・プラン研究所」や、ATTAC、日消連といった運動体や、「G8サミットNGOフォーラム」に加わっているような団体も一部加わって、つくられました。11月中旬には、より多くの人たちや運動体に向けて「G8を問う連絡会」への参加を

求めるための「呼びかけ文」を出したいと考えています。

なお、来年の日本でのG8サミットでは、7月の洞爺湖での首脳会議と併せて、東京では「G8開発大臣会議」、大阪では「G8財務大臣会議」、核再処理施設のある青森県では「G8エネルギー大臣会議」、そして富山に近いところと言えば、新潟での「G8労働大臣会議」といったように、10もの閣僚会議が予定されています。それに対して、関西の運動体では、地元での閣僚会議の開催に対して、何らかのアクションを起こすことを計画しているそうです。

その他、G8サミットに対抗して、大学の学者や知識人を中心として、G8への疑問や批判を表現するための国際シンポジウムを開催しようという動きもあるようです。また、この前のドイツでのG8サミットも含めて、G8サミットではどこでの場合でも警備の問題が大きなものとしてあり、事前の弾圧も含めて警察の規制や取り締まりが厳しくて、しっかりした救援体制をつくるが必要になっています。最近、原発の問題にも取り組んでいる日弁連の海渡雄一さんという弁護士と少し話をしたのですが、「G8サミットNGOフォーラム」でも、警察の様々な弾圧を危惧しているようです。日弁連全体としてどこまで動くのか分かりませんが、弾圧対策のための何らかの弁護士グループをつくるのが、今後の検討課題になっているようです。その他、一般のマスメディアでは報道されないような、G8サミットに対する抗議行動や反対の声を伝えるための市民の手によるメディアセンターをつくらうとする動きも出てきています。(编者註：08年4月、G8サミットに向けた過剰警備・弾圧による人権侵害に対処するための組織として「WATCH／サミット人権監視弁護士ネットワーク」が発足。また、同月には、「G8メディアネットワーク」のサイトがスタートし、08年6月現在、反グローバリズム運動に関わる人たちへのインタビューや、「フリーター」のメーデーの映像など20以上もの動画をネット上で配信)

以上が現在、私が日本でのG8をめぐる運動側の動きとして知っていることです。

「フリー・トーク」での論議から

□地域での反 G8 の動きや、G8 をきっかけとする運動間での横断的な動きは？

参加者A 今日の小倉さんの話の最後で、G8に対する日本の各地での現在の取り組み状況について話されましたが、洞爺湖サミットが開かれる現地の北海道や、東京といった大都市以外での、地域のレベルでの反G8の動きはありますか。また、私は反原発運動に関わっているのですが、G8サミットをきっかけにそのような大きな課題について異なる運動間での横断的な動きが生まれているといったことはあるのでしょうか。

小倉 地域での反G8の動きについては何もないということではなくて、私に見えていないだけだと思うのですが、今のところよく分かりません。

来年のG8サミットでは、政府側としては環境の問題を一つの焦点にしていきたいと考えていると思うのですが、環境の問題を口実にして、「温暖化防止」と連動させながら、エネルギーの確保のために原発を推進していきたいというのは、慢性的な石油不足を抱えているG8サミットに加わるような先進国の思惑として、当然あるでしょう。もともとサミットでは、原発推進ということを繰り返し主張しています。チェルノブイリ原発事故があった86年に開かれた東京サミットでは、声明文が出ていて、原発事故に憂慮を示しつつ、ソ連がきちんと原発の安全性を確保することを怠ったから事故が起きたということであって、西側の原発は安全であると言っています。

もどかしいのは、先程ふれた「G8サミットNGOフォーラム」では「反G8」ということを掲げないと言っていることで、その中には、環境の部会もあり、風力発電や太陽光発電といったクリーンエネルギーや代替エネルギーに取り組んでいる市民グループが、ポジションペーパーと呼ばれるような意見書を出したりしているようですが、原発に反対している現地の運動とつながりをつくろうとはしていないように思います。逆に、今のところ、反原発運動を担ってきた現地の運動が、反G8の運動とつながることもできてはいないのではないかと思います。

「G8を問う連絡会」の中にも、遺伝子組み換え作物や巨大アグリビジネスの問題といった、農業問題については取り組もうという人たちが何人か入っているのですが、原発の問題については、もっとこちらからの働きかけが必要なのではないかと考えています。

□小倉さんとしてG8に反対する理由は？

参加者B 自分などはまずG8サミットで何が話されるのかという以前に、この世界がほんの一握りの権力者によって支配されているのだということを見せつけられること自体が耐え難いという気持ちになってしまうのですが、小倉さんや小倉さんと一緒にG8に反対している人たちは、とりわけ、どのような理由からG8に反対しているのかということ、この機会に聞きたいと思うのですが。

小倉 G8サミットになぜ反対するのかということについては、最初のきっかけとしては、反グローバリズム運動の一環としてといった程度で、特に深い理解をG8サミットに対してもっていたわけではなくて、先進国の首脳が集まって厳重な警備に囲まれた中で「密談」ということ自体が、まず条件反射的に許せないという気持ちだったと思います。しかし、その後サミットのことをいろいろ調べる中で、それが非常に

問題のある（日本の場合は憲法上も参加に問題があります）、しかも現実の国際関係に少なからぬ影響をもつ会合であることを知るようになりました。

もう少し理屈づけて言いますと、サミットというのは、元々はあくまでも非公式の首脳会議として始まり、現在もそうであるのにも関わらず、現実には先程もお話ししたように10もの閣僚会議があり、更にその下に高級官僚レベルの会議があるというように、G8サミット全体として恒常的に組織だったものとして構成され、財務省会議は年に3回も開催されています。

国連機関がそれほど良いものだとは思いませんし、IMFや世界銀行にしても一応は投票によって決定するという手続きがあるわけですが、G8サミットでの一連の会議にはそのような形式的な決定手続きすら存在していませんし、基本的には全て「密室会議」です。この間の反グローバリズム運動の中で問われているような、どうやってグローバルな民主主義をつくりだすのかという議論と真っ向から対立するものであるという意味でも、そのような非民主主義的な意思決定構造をもつG8サミットというものの存在を認めるわけにはいきません。

これは日本が国連の安保理事会の常任幹事国になっても良いのかという議論とも関わることですが、G8サミットの問題を日本独自の政治的なコンテクストに関連させて言うと、憲法9条をもち、それに拘束されているはずの日本が、世界有数の軍隊をもつ他の先進国と同じテーブルについて、世界の安全保障について「対等」に議論すること自体が本当に許されるのか、という議論があってしかるべきだと思います。実際に、そのことによって、日本が自衛隊の海外派兵や、アメリカとの軍事同盟の中にひきづりこまれるということが起きています。

例えば、イラク戦争でアメリカが「勝利宣言」を出し、イラクの占領統治を終えて傀儡政権に権力を委譲することになった後に、アメリカ軍がイラク駐留を続けるための枠組みとして「多国籍軍」というものをつくったのですが、それに日本が参加することを当時の首相の小泉がいち早く表明したのは、サミットの間でした。正確に言えば、サミットの前日にブッシュ大統領と小泉との会談があって、恐らく自民党内でも何の相談もなく、そこで小泉が「多国籍軍」への参加を表明したわけですが、そのことによってアメリカが他のサミット参加国の首脳に対して、アメリカのイラク支配政策に対する明確な賛同者がいるということを見せつけることに、日本が協力する形になりました。

また、これは80年代の話ですが、当時の首相の中曽根が例の「浮沈空母発言」をした年のサミットで、中曽根が、アメリカがソ連を射程に置いて中距離核ミサイルをヨーロッパに配備しようとしたことに対して、「中距離核ミサイルの配備はソ連にとっての脅威になるのだから、結構な話ではないか」と言って、支持を表明するということがありました。それに対して、当時のマスコミでは、「NATOの加盟国でもない日本が、NATOの核戦略に対して口出しをするとはどういうことだ。いつから日本はNATO

の加盟国になったんだ」ということで、大きな問題になりました。

そのように、憲法9条に拘束されているはずの日本が、アメリカなどの軍事戦略になし崩し的にひきづりこまれていく可能性が最も高い「密室会議」がこのG8サミットであるという意味でも、日本はそこから脱退すべきだと思います。（*13）

■〈註〉

- *1 カール・ポランニーの著書の日本語訳は、彼の主著である「大転換」（東洋経済社）も含めて、現在、大半が絶版になっているが、「ちくま学芸文庫」に、彼の著書として、「経済の文明史」と「経済と文明」が入っている。なお、彼の思想を「大転換」以降から晩年までの時期にわたって、その限界までも含めて紹介しているものとして、佐藤光「カール・ポランニーの社会哲学」（ミネルヴァ書房 06年）がある。
- *2 このような問題意識から、フォーディズム的生産体制の成立がもたらした社会構成上の転換や、消費・再生産といった観点から、既成の経済学の批判に立って、現代社会を捉えなおすことを試みたものとして、小倉利丸「支配の経済学」（れんが書房新社 85年）がある。
- *3 イタリアでの「アウトノミア」運動の展開やその理論については、前掲の「支配の経済学」にもふれられているが、より詳しくは、「インタビュー 小倉利丸／小倉虫太郎＋酒井隆史（聞き手）：アントニオ・ネグリとは誰か」（現代思想98年3月号）参照。
- *4 イタリア憲法の第1条の1には、「イタリアは労働に基礎をおく民主共和国である」、同第4条の1には、「共和国は、すべての市民に労働に対する権利を承認し、この権利を具体化するための諸条件を支援する」とある。
- *5 「アウトノミア」時代のネグリの独自の労働概念については、小倉利丸「生産的労働者主義の伝統からの切断 アウトノミア運動の中のマルクス」（現代思想・前掲号）参照。
- *6 「アウトノミア」の時期やその後のイタリアでのフェミニズム運動の展開や、再生産労働や不安定労働の分析を軸にした資本主義批判については、マリア・ローザ・ダラ・コスタ「家事労働に賃金を」（インパクト出版会 86年）、ジョバンナ・フランカ・ダラ・コスタ「愛の労働」（インパクト出版会 91年）参照。
- *7 モロ暗殺を口実した「アウトノミア」に対するイタリア政府の容赦のない弾圧の様子や、同じ時代状況を共有しながら「アウトノミア」運動と「赤い旅団」のテロリズムとが運動的な相克関係にあったことについては、前掲の「インタビュー」の他、インタビューに対してネグリが自らの軌跡や思想を語る

という形で構成された「ネグリ 生政治的自伝」(作品社 03年)の中でも、生々しく語られている。なお、ネグリは、97年、フランスでの亡命生活に終止符を打ち、イタリアへの「帰還」を行ったが、空港で即座に収監、再逮捕。その後、ネグリは、昼間、外出できる「労働釈放」となり、02年4月からは獄中から出て指定住居に生活する「選択的拘留」状態だったが、03年に完全釈放。現在、著作活動と併せて、世界各地で活発な講演活動を行っている。

- *8 サパティスタの闘争のプロパガンダや支援の手段としてのインターネットの役割に焦点を当てて分析しているものとしては、山本純一「インターネットを武器にした<ゲリラ>」(慶應義塾大学出版局 02年)や、毛利嘉孝「文化=政治」(月曜社 03年)の『第5章 情報空間の抗争』参照。
- *9 小倉さんはコンピュータ技術や監視テクノロジーの発達をもたらす監視社会化の問題に早くから関わっているが、小倉さんによる監視社会批判の著作としては、以下のものがある：「監視社会とプライバシー」(編著・インパクト出版会 01年)、「エシュロン」(編著・七つ森書房 02年)、「路上に自由を監視カメラ徹底批判」(編著・インパクト出版会 03年)、「グローバル化と監視警察国家への抵抗」(編著・樹の花舎 05年)、「危ないぞ！共謀罪」(共著・樹の花舎 06年)。

また、警察による電話の盗聴や、ネット上の情報に対する監視・「盗み見」の実態については、併せて、古川利明「デジタル・ヘル」(第三書館 04年)の『第2章「電話盗聴・電子メール盗み見」の歯止めなき拡大』参照。

- *10 99年のWTOの閣僚会議を流会に追いやったシアトルでの闘争のスタイルの画期性や意義については、前掲の「文化=政治」の『第1章 文化と政治運動の転回点 シアトルの闘争』参照。また、小倉さんがシアトルの反WTO闘争の意義についてふれた文章としては、『グローバル資本主義と闘う私たちの課題—アジア社会フォーラムをふまえて』(「季刊 ピープルズプラン」No. 21)参照。
- *11 北沢洋子「世界は地の底からゆれている 世界社会フォーラム報告—シアトルからムンバイまで」(「世界」04年3月号)では、シアトル以来の反グローバルズム運動の流れをたどりながら、04年のインド・ムンバイでの「世界社会フォーラム」についてレポートしている。併せて、武藤一羊「アメリカ帝国と戦後日本国家の解体」(社会評論社 06年)中の『第二波世界変革運動としての世界社会フォーラム』と『生成の場としての廃墟 ムンバイ社会フォーラムから』参照。また、「世界社会フォーラム」での論議・討論については、ジャイ・セン他編「世界社会フォーラム 帝国への挑戦」(作品社 05年)参照。なお、小倉さんによる世界社会フォーラムの意義や課題に対する分析・見解については、『座談会 帝国へ挑戦する世界社会フォーラム

その現状と可能性 話し手：武藤一羊・小倉利丸・木下ちがや・大屋定晴』（「情況」05年1・2月合併号）、『閉ざされた「自由な空間」から社会的空間のオルタナティブへー世界社会フォーラム＝空間論批判』（「季刊 ピープルズプラン」No. 38）参照。

- *12 07年のドイツ・ハイリゲンダムでのG8サミットに対する抗議行動の参加者に加えられた警察の暴力的な規制・取り締まりや、日本のマスコミでは報じられない、抗議行動の参加グループの相互のスタンスの違いを尊重した上でのサミットへの対抗行動のあり方については、栗原康「オルターグローバリゼーション運動とアナキズムードイツ反G8運動報告から」（「情況」07年11・12月号）参照。併せて、矢部史郎「反G8サミット運動の現在」（「図書新聞」07年7月7日号（上）・7月14日号（下））も参照。
- *13 G8サミットに対する小倉さんのより詳しい批判・分析は、「G8サミットとグローバル資本主義の覇権構造（上）」（季刊「ピープルズ・プランNo. 40」）、「同（中）」（同No. 41）参照。併せて、「G8を問う」第2回学習会での小倉さんの話の要旨を掲載した「G8を問う！共同行動・富山 リーフレットNo. 3」も参照。また、小倉利丸『虚構の帝国を支えるG8サミット』（ATTACフランス編「徹底批判G8サミットーその歴史と現在」作品社 08年）も参照。

「米騒動」90周年企画 10月11日（土）－12日（日）

SŌDŌ SŌDŌ) ! 米騒動! ——「極窮権」(註)の再＝創出へ——

「米騒動」から90年—「保障されざる者」／「プレカリアート」の行動群が「現代の米騒動」とも名指される現在、「発端」の地の富山で、「米騒動」が表出したものをめぐって「想動」し、その地平をあらためて引き継ぐことへ向けて「^{SŌDŌ}創動」_{SŌDŌ}することを、試みたい。

〈註〉「極窮権」——90年前「米騒動」の全国的展開の渦中で、「米騒動」をめぐる論評の中で、福田徳三が使用した「自然法」上の概念であり、「Right of Extreme Need」、つまり、「生存権の保障を求める行動の権利」を表すものです。

- i. 富山湾岸乞食行脚
- ii. シンポジウム：「『米騒動』90年
——もうひとつの米騒動像を求めて」
- iii. SŌDŌ SŌDŌ 米騒動!
——貧窮極マレバ ワレラ 生ノ蜂起ヲ果タサン——
- iv. 窮民青空炊きだし食堂
(詳細は、生・労働・運動ネットまでお問い合わせください)

2008年6月

生・労働・運動ネット

富山市神通町3-5-3 (神通大橋東詰手前左)

E-mail : jammers@net-jammers.net

TEL 076-441-7843 FAX 076-444-6093